うつろふと云フに家をうつろふもところなかふるなれバ同言もてあやとするか

べみハべくしてなり六帖にちりぬべきさあるよろし

マスレバ。秋ノ一ト サカリバカリデハゴザリマセヌ。秋ガスギテカラ又マイナド。盛リノ時節ガ、ゴザリマス。恐レナガラ。陛下ノ御義モコノ菊ノ花ノトホリト存ジ奉リマス

人の家ありけるきくの花をうつしうゑたりけるをよめる　つらゆき

咲うめし宿しかいれバきくの花色さへにこそうつろひにけれ

○此ノ菊ノ花ハ始メニ咲メヤド、。ヤドガ替ツテウツ、タレバ。所ノウツタバカリガ花ノ色マデガ。アノヤウニウツ、テカハツタワイ

題しらず　よミ人しらず

佐保山のむ、そのもミち散ぬべと夜さへ見よと照す月かげ

○アノサホ山ノ柞ノ木。モミナガ。オツ、ケ散ウヤウニ見エテヨッテ。

閑雄ハ才學ありて能書なり閑居をこのめる人にて山里にこもれるもて東山近士と名づけられたること國史に見えたりこの歌はそこにてよまれしなるべし

ながるめりはながれのべていふことバなり

晝バカリデナクテ。夜ル モ人ニ見ヨト云テ。アノヤウニ月ガアカイ

ミやづかへ久しうつかうまつらで山里よとこもり侍りけるよよめる　藤原閑雄

おく山のいはかきもミぢ散ぬべしてる日の光り見る時なくて

○此ヤウニ高イ岩ノ築地ノヤウニ立テアル陰ニアル奥山ノ紅葉ハ日ノ光ヲ見ル時モナシニ散テシマウテアラウト思ハレルガ。アトクチヲシイオレガ身ノウヘ モテウド此ノ紅葉ト同ジコトデヤ

題しらず　よミ人しらず

立田川もみぢみだれてながるめりわたらば錦中やたえなん

○立田川ハ紅葉ガチリミダレテ今最中流レルヤウスニ思ハレル。ソレデハ今渡ツタナラバ。アツタラ錦ガマン中ガラキレルデアラウカイ

この注は例のさらず木の葉の風にちるはもさよりのことにて雨に散とよめるも古歌に多し

しのばんハしたはんなり萬葉にもへらしたふことなしのぶと云てかくすことにいはずこの集には專ラかくすことにいひてこの歌のごとくしたふ意に一はすくなし

もみぢの如くと云を畧して紅葉のとのみ云例萬葉に多し

秋は來ぬと云にさまくの說あれどわろし秋のはじめて來りなどいふにあらずいつにても秋になりてといふなり

此歌いわる人ならのみかどの御歌なりとなん申をたつた川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山ゝ時雨ふるらし

○此川ニ紅葉ハナカレル。神ナビノ御室ノ山ニ時雨ガシテ風ガフクサウナ。時雨といふに風のふくことを。もたせたるなるべし

またいわすか川もみぢ葉流の。清 戀しくば見てもしのばん紅葉ばをふきな散しそ山おろしの風

此歌不注人丸歌

○紅葉ハモウ散テシマウタガ。今カラモ散タ紅葉ノ戀シイ時ニハ。此落葉ヲナリに見テ愛セウニツノヤウニヨソヘフキチラシテヤルナイ。コレ山オロシノ風ヨ。千秋云。このもみぢ葉は。ちりしにぢゝに落葉をいへるなり。見てもといふにて悲び聞えたり。せめては落葉を見てもなり。もも

じあはれなり。

秋風よわへぎちりぬるもみぢ葉のゆくへさだめぬ我ぞかなしき

○秋風ニエコタヘズニ散ルアノ紅葉ノ。アナヤコナヤ散テイテ。ドコニナタ方ノ定マラヌヤウニ。オレガ身モ行末ノドウナルコヤラシレヌガサカナシイ

秋ぬきぬ紅葉ばやどよふりしきぬ道ふみわけてとふ人もなし

○物ガナシイ時セツニハナツタナリ。紅葉ハ庭ヘチツテシマウ。ソノ散シイク落葉ヲフミ分テタレモ尋ネテクル人ハナシ。サテモ〳〵何モカモソロウテサビシイコトカナ。三のもどにば。心をつくべし。餘材に初句を秋の暮といふ來ぬといへるいえいとなり。秋といふ物かなしき時節といふ意よいへる例多し

ふみわけてさみはやとゝいんもみぢ葉のふりかくしてし道と見ながら

色のちぐさ貫之筆の本にはちぐさの色とあり

○アノ家ヘ〻イル道ハ。アノヤウニ紅葉ガナリシイテ。タレモ人ノミシラヌヤウニ。フミ分テコヌヤウニト。隠シテアル道ギヤニ。サウト見ナガラ。ソレヲフミ分テ。今サラ見舞ウベキヿカ。サウト見ナガラフミ分テ見舞ハヴヤウハナイ

秋の月山べさやかゝてらせるゝおつるもみぢの數を見よとか

○月ノアノヤウニ山ヲサヤカニテラスノハオナル紅葉ノ數ハイクツギヤト云コトヲトクト見ヨトテノヿカヤ

吹風の色のちぐさゝ見へつるゝ秋のこのゝのもれば なりけり

○風コハ色ハナイモノギヤニ。アノヤウニ風ノ吹ク色ガ。イロ〳〵ニ見エルハドウシタコトカト思ヘバ。紅葉ノナルユエギヤワイ

せきと

白樂天の詩に織霜織霞ニ秋錦さあるなどをされるなるべし

たゝすみては立やすらひてあるとを云ブ諺に云ったのむ木ノ下に雨もりてと云フ如く世によろづわびたる人の立よる木ノ下ハ紅葉もたのむかげなくちるとなり何にても心にかなハぬ人をわび人と云リ

霜のたて露のぬきとそよわからし山の錦のおればかつちる

○山ノ紅葉ハ露ヤ霜ニ染マッテ。ソシテ錦ノヤウニナルギヤ。スリヤ霜ト露トガ錦ノハタヲ織ル竪ト横トノ糸ノヤウナ物ギヤガ。ソノ露ト霜トノタテヨコノ糸ガサ弱イサウナ。ソレユエカシテアノ紅葉ノ錦ガ織ルカト思ヘバ。ハヤ片方カラ破レルヤウニナリマス

うりんゐんの木のかげよたゞすゝてよみける　僧正遍昭

わび人のわきて立よるこの本ハ頼むかげなく紅葉散けり

ナンジフナ身ハ。ナニカラナニマデナンジフナモノカナ。コレハ頼モシイヨイ陰ギヤト思フテ見タテ、立ヨルコノ本ハ。ヨニモ早ウ紅葉ガナッテシマウテ。トリワケテ早ウ

六帖にこのはみなからくれなゐくゝるとて紅のあやにもたきまさる哉などよめるも絞染なればこそ紅のあやにもといりかつ此歌くゝるにおらぬ證ハ水ニ云フ詞も見へずよてくゝへ染

二條后の春宮のみやす所と申しける時に御屏風に立つた川に紅葉ながれたるかたをかけりける を題によてよめる　そせい

もみぢ葉のながれてとまるみなとにハ紅ふかき浪や立らん

此ノ立田川ノ紅葉ガ。ツヽト下ヘ流レテイテ。トマル湊ノアタリニハマツカイナ色ノヨイ涙ガメツデアラウカ

ちはやぶる神代も聞ぎ立田川からくれなゐに水くゝるとハ　なりひらの朝臣

此ノ立田川ヘ。シゲウ紅葉ノ流レルトコロヲ見レバ。トント紅鹿子紅シボリ。ト見エルワイ。サテ〳〵奇妙ナコトカナ。神代ニハサマ〳〵ノキメウナ事ドモガアツメヂヤガ。此ノヤウニ川ノ水ヲ。紅ノクヽリツてふことなよめるとおもひ定むべし

塵に散なゝ毛かけたりくらぶ山にくらきなよせたり

古木には道もしられぬさとあり

飛鳥の神並なり

メニシタト云フ「ヘ。神代ニモイツカウキカヌコヂヤ

千秋云。くゝりぞめは。令式などにも見えて。頗繽さいへるこれなり

是貞のみこの家の歌合の歌　としゆきの朝臣

我來つるかたもしられずくらぶ山木ぐのこのはの塵とまがふは

此ノクラブ山ノ木ドモノコノハノ最中チリマガウノデ。今トホツテ來タ方モ。ドチカラキタヤラシレヌ

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心ちこそすれ　たゞみね

今ハ秋ノコロ此ノ神ナビノミムロノ山ヲ通レバ。紅葉ガチリガヽルデ錦ヲ着ルコヽロモチガサスルワイ。千秋云。たちの辭なきは。俗語にはこの詞なきがよろしきなるべし

から國朱買臣といふ人の言に富貴にして故郷に歸らざるハ錦衣を着て夜行が如しとのたまへりそれよりから國にておほくいへるもてゝにも夜の錦とたとへなせり

北山にもみぢをらむとてまかれりける時よよめる　貫之

見る人もおくてちりぬるおく山の紅葉ハよるの錦なりけり

ナンデモセンノナイフチハ夜ルノ錦ト云デヤガ。見ル人モナシニ此ヤウニムダニ散テシマウタ奥山ノ紅葉ハ。ナンボ見事デ錦ノヤウデモマコトニ夜ノ錦デヤワイ

秋のうた　かねみの王

立田姫たむくる神のあれハこそ秋のこのはのぬさとちるらめ

立田姫ハ神樣デヤガソレデモ又御手向ナサル神樣ガアルヤラコソ。御自身ノ御染ナサッタ。紅葉カ。アレトント手向ノ麻ヲチラスヤウニナリマス

小野ハ京の北にある山里なり

今の本に過てとあるハわろし古本にハこへてとあり

立田川のかみに神並山のあるがごとく思ひあやまりてよめる歌をさることゝそらにおぼへてよめれバ又それに從て撰者ハはしの詞を作りてかけるものあるべし

小野といふところにすみ侍ける時もみぢと見てよめる　つらゆき

秋の山もみぢをぬさと手向れバすむわれさへぞ旅でゝちする

秋ノ山デハアレアノトホリニ。紅葉ノチルヤウスガテウド旅ノ人ノ道クダリ神々ヘ麻ヲチラシテ手向テユクヤウニ見エルコヨッテ住デ居ルコチマデガドウヤラ旅ノコヽチガスル

神なひ山を過てたつた川を渡りける時よるもみぢのながれけるをよめる　きよいらのふかやぶ

神なひの山を過行秋かれバたつた川にぞぬさやたむくる

コチモ今ハ神ナビ山ヲ過デキテ立田川ヲ渡ルガ。暮テ行ク秋モソノトホッデ神ノゴザル神ナビ山ノ。紅葉ハモウ散テアソコニハスギテ西

この頃の人名所などハよくも問ハで例の歌になづみてよめるゆへにかくひが言のいでくるなり

新撰萬葉に三の句うかべるハ末の句舟ざりける六帖に舟かとぞ思ふとありいづれも明ゆ

伊勢が涙のはなおきからさきにちりくゆり水の巻とハ風やなすらんとよめるもこれなり

あへぬこゝにてハ絶ぬにて常の言にハなかれもいてぬといふがごとし

ヘユケバ。アレアノヤウニ。紅葉ノヌサヲバ立田川ヘナタムケマス

神なび山ハ山城國乙訓郡立田川はその西にて津國島上郡なりともよ山崎のあたりなりこの事別よ考へあり

千秋云。師のこの考ハ。玉勝間の初若菜巻に。くはしく見えたり。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　藤原おき風

白なみよ秋のこのはのうかへるとあまの流せる船かとぞ見る

浪ノ上ヘ木ノ葉ノナツテウイテアルノハ。獵師ノ流シタ船デハナイカト見エル

立田川のほとりにてよめる　坂上是則

もみぢ葉のながれざりせば立田川水の秋をば誰かしらまし

木葉ノ青イノハ色ノカハルデ秋ガシレルガ。氷ノ青イノハ色ノカハラヌモノナレバ。秋ガシレヌニ。今ハ立田川ノ氷ヲ見レバ。紅葉ガ流レルデ秋ギヤト云フガシレタ。モシ此ノヤウニ紅葉ノナガレルヲガナイナラバ。水ノ秋ナバドウシテ誰レカシラウヅ。シルモノハアルマイ

おがの山ごえよりてよめる　はるみちのつらき

山河に風のかけたるあらがきハおがれもあへぬ紅葉なりけり

山川ヘアレ風ガモテキテシガラミナカケタト見エルノハ。エナガレモセズニトマツテアル。紅葉ギヤワイ。アレハ風ガフクデアマリヨケウモミヂガチツテセキカケ〳〵流レテ。クルニヨツテサラ〳〵ト下ヘ。エ流レテハイカズニアノトホリニシガラミノヤウニヨドムギヤ

池のほとりにて紅葉のちるをよめる　みつね

濁れバ影の見えぬ故に水きよみといひて池のさまをそへたり

見てをのをのと云おなじ

風ふけば落るもみぢ葉水清みちらぬ影さへ底に見えつゝ

風ガフケバ。チリヅヽノ〳〵紅葉ガチリカケタガ。此ノ池ノ水ガキヨサニ。マダチラスニ枝ニアル紅葉ノ影マデガ底ヘヨウウツヽテ。ハヤ大分チツタヤウニ見ニル

亭子院の御屏風の繪に川わたらんとする人のもみぢのちる木の下に馬をひかへてたてるをよませたまひければ

つかうまつりける

たちとまり見てを渡らんもみぢ葉は雨とふるとも水はまさらじ

シバラク立トマツテ。アノ紅葉ヲ見テカラ此ノ川ハ渡ラウ。雨ガフレバ水ガマシテ川ガ渡ラレヌデヤガ。紅葉ハ雨ノヤウニナンボフツタトテモ。水ハマシハスマイホドニ

かりほとはぶきて云なりほとは音便にてなのごとくとなふ萬葉に借廬とかけりこれは田所の遠き里は秋になりてその田所によりてかりそめの庵を作りてそこに住稻を刈干などしはて〻後里へかへるなりその庵をかり行と云フし〻鳥などを追さていとちひさく作りておくを云フにあらず

是貞のみこの家の歌合の歌　たゞみね

山田もる秋のかりほにおく露はいなはせ鳥の涙なりけり

秋ノコロ山ノ田ノ番ヲスル此ノ小屋ヘコノヤウニ露ノオイタハ。稻負セ鳥カ此ゴロハ來テシゲウ鳴ケバ。ソノナミダヂヤワイコレハ

題しらず　よみ人しらず

ほよも出ぬ山田をもるとふぢ衣いなばの露よぬれぬ日はなし

○マダ穗モデヌ山ノ田ヲトウカラ番ヲスルトテ。毎日〳〵稻ノ葉ノ露デキルモノヽヌレヌ日ト云ハナイ。百姓ト云モノハアヽナンギナモノデヤ。此ヤウナヤウスヲ。上ニハ御存知アルマイカ。藤衣ハ。いやしきものゝきものなり。千秋云○こは君たる人はことにふかく心をとめて味ひ給ふべき歌なり○下として貴き人の御心バヘをも知り奉り○また貴き人の下かの○ありさまをもよくしろしめすべきは歌なり○

ひつぢは一度刈たる稻茎より又葉の生ちるないふ

僧正遍昭と云ふ詞は後に加へし物歟

かれう田に、おふるひつちのほに出ぬい世を今さらにわきはてぬとい

○苅テシマウタ田ヘ。又アトヘハエタヒツチノ穂ノデヌノハ。時節モモウ秋ガハテタナリ。世ノ中ヲモウアキハテタレバ今サラ。穂ヲダサウヤウハナイト思ウテヤフカイ。千秋云○今さらにといふ詞は。三の句の上へうつして心得べし。

北山に僧正遍昭とたけがりゐまかれりけるよよめる　そせい法師

もみぢ葉い袖よりきいれてもて出なん秋い限りと見ん人のため

○此ノ紅葉ヲバ袖ハコキオロシテ入レテ持テ此ノ山ヲ出テ。インデミヤゲハセウ。人ハ定テ。秋ハモウハヤ。ヤマイギヤト思フテ居ルデアラウガサ思フテ居ル人ノタメニサ

寛平御時ふるき歌たてまつれとおほせられけれは立田川もみぢ葉ながるといふ歌とかきてそのおなじ心をよめりける　おきかぜ

みやまより落くる水の色見へて秋いかぎりと思ひしりぬる

○モシヤ深山ナドニハマダ秋ガ殘ッテアルデモアラウカト思フタガ。此ヤウニ深山カラ。散ダ紅葉ノ流レテクル水ノ色ヲ見レバサテハモウイヨ〳〵秋ハシマヒニナッタト思ヒシッタ

秋のはつるとゝろを立田川に思ひやりてよめる　つらゆき

年ごとにもみぢ葉ながす立田川みなとや秋のとまりなるらん

○毎年〳〵秋ノ紅葉ヲ。筏ヤ船ノヤウニ流シテヤル。立田川ハ川下ノ湊ガ秋ノトマル所デアラウカイ。ソレナラ湊ヘ尋子ヲイテ秋ニアヒタイ

今の本に立田川に思ひやりてとあるいわろし古本立田川をと云をとるべし

夕づき夜ハをくらきといはん冠辭なり晦日に夕月ハあらまゝくむつ歌の意にあらぬことしるべし

米にたむけをいへバ上ミの道ハ秋くれて行く旅路のよしなり

モノヂヤ。クレテ行ハノコリ多イ秋ヂノニ

ながづきの都ごもりの日大井よりてよめる

夕月夜をぐらの山に鳴鹿のこえのうちよや秋いくるらん

○ケフハ九月晦日デモウ日モクレ方ニナツタガ。アレアノ小倉山デ鹿ノナク長イ聲ノキレヌウチニ。ハヤ秋ハクレテシマウテ。アラウカ

同じつでもりの日よめる　みつね

道ならば尋ねもゆかんもみぢ葉をぬさと手向て秋ハいけり

○秋ハモウ紅葉ノチルノヲ道ノ神ヘノ麻ニシテ手向テ。旅立シテ。インデシマウタワイサテモ〳〵ノコリ多イカナ。道ヲシツタナラ跡カラ尋ネテナリトモユカウ

頭書 古今和歌集遠鏡巻之五 終

頭書 古今和歌集遠鏡巻之六

冬歌

題しらず　よみ人しらず

立田川へ深おりかくかみな月しぐれの雨をたてぬきにして

○立田川ヘ紅葉ノ散テ流レルトコロヲ見レバ。時雨ノ糸ノヤウナ雨ヲ。堅横ノ糸ニシテ機ヘカケテ錦ヲ織ルト見エル

冬の歌とてよめる　源宗于朝臣

山里ハ冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へバ

○山里ハイツデモサビシイガ。冬ハヤツベツシテサビシサガマシタワイ。人ノコヌヿヲ人目ガカレルト云ヂカガ。今マデハクマ〳〵見エタノ人目モ

これハ上の霜の經露の緯とよめるとハ異なり相似て思ひまどへる説あり

人目のめハ見るものなれバ云人めがるゝとハ萬葉に離の字疎の字をよみてかゝく遠ざかることによめり

今の本にハ清けれバとありいひめぐらしてハ聞ゆれど古本新撰萬葉則詠ごもにさむけれバとある方いにしへの意なり

夕されバタにしあればてふ詞なり春さればこゝを春之在者をかき御言にしあればと云べきを美許爾爾作例波とよめるを見るべし阿の約佐なれば春されば御言にされば春されば御言にされば云ってこの夕さればも名にあれば

カレル。草枯レタコヨッテ。かれぬと思へバ〳〵たゝかれぬれバといふ同じ思フ意なし此ノ例多し

題しらぞ

大空の月のひかりし清けれバ影見し水ぞまづ凍たる

よみ人しらぞ

○昨夜ノソラノ月ガキッウサエタニヨッテ。ソノ影ノ見エタ水ガッケサハ

アレアノヤウニマヅ一バンニコホッタワイ

千秋云。三の句。菅家萬葉則詠などに衆けれバとあるその才まさりて聞ゆ

夕されバ衣手寒しみよし野のよしの山にみ雪ふるらく

○此コロハユフカタニナレバ。イカウ寒イマ一ッ着ニヤナラヌ。コレハモウ吉野山ヘハ雪ガフッタサウナ

今よりハつぎてふらなん我やどの薄おしなべふれる白雪

○コレカラハツヾイテ段々フレカシ。コチノ庭ノスヽキラオシナビカシテッモッアノ雪ケシキッサオモシロイ

と云ッなる意知るべし

後世雪げとハひ沫雪といふハ春のことなりと定むるハかたはく冬も雪のきゆるハ雪げとよみ沫の如ふるハ冬も流雪と云ッのみ

ふる雪ハかつぞけぬらしひきの山の瀧つ瀬音まさるか

○山ハ雪ガフルヤウスヂヤガ。フルウチニ。ハヤ片一方カラッキエルサウナソノ雪トケト見エテ。アノ山カラ流レオチル川水ガマシテ。音ガアレ高ウナッタワ

この川ともみぢ葉ながるおく山の雪げの水ぞ今まさるらし

○此ノ川紅葉ヘガ流レル。コレマデハ流レテハコナンダカ。今アノヤウニ流レテキタノハ。川上ノ奥山ノ雪トケテ水ガマシタサウナ。ソレデ川上ニヨドンデアッタ木ノ葉ガ今流レテクルヤヤ

故郷ハ吉野の山も近けれバひと日も深雪ふらぬ日ハなき

○此吉野山ノ里ハ高山ガ近イニヨッテ。ケガナ一日モ雪ノフラヌ日ト云ハナイ

冬ごもりは籠居にうもるゝなのみ云なり思へることせばし冬は閉蔵とてよろづのものゝみな内にこもるを云なり

我やどゝ雪ふりおきて道もなしふみいけてとふ人しなければ

○コヽノ庭ハ。イヤメンニ雪ガツモツタマヽデ道モナイ。ソコヲ分テ尋子ルテツ人ガナイギヤニヨツテ。通ツテクル人カアウナラセメテ道ハシレテラウニ

紀貫之

冬のうたとてよめる

雪ふれば冬ごもりせる草も春にしられぬ花ぞ咲ける

○冬ガレテマダメモデヌ草モ木モ。雪ガフレバ。春ニハサタナシノ花ガ咲タワイ。ソウタイ花ハ春ニナツテ咲クモノナヤニ

きのあきみね

おかの山こえにてよめる

白雪のところもわかずふりしけばいはほにも咲花とそ見れ

○雪ガトコト云ナシニ。タヒラ一メンニツモツタレバ。木デハナウテ花ノ咲マイ岩ヘモサ花ガ咲タト見エル

千秋云。志賀の山とえハ。花の名ごころなれ。ば春の花のこゝを思ひて。よめるならんか

坂上これのり

ならの京にまかれりけるときはやどれりけるところよてよめる

みよし野の山のしら雪つもるらじ故郷寒くなりまさる

○今夜ハ吉野山ノ雪ガイカウツテモルサウナ。ソレデ此ヘンマデガ此ノヤウニ。ダン〳〵サムサガマサルナヤ

寛平御時きさいのみやの歌合のうた

ふぢわらのおきかせ

浦ちかくふりくる雪いしらなみの末のまつ山こをりとぞ見る

○カノ奥州ノ末ノ松山ト云所ハ古歌ニ浪モコエナントヨンデ。アツテ名

このつもるかろうゝと云なりまさるなりといふハ雪のやふかきほどの意なればつもるらゝといひなりまさると云なり

ふみ分て入にしと云ハいとときの事を云さみゆるをこのうたハ猶其入にし冬の内によめるとみばいとゞあハれなるべし

源氏手ならひの巻に小野にをみわびたる所に雪ふかくふりつみ人めたにたるころぞ思ひやりたる方なかりけるとかけるにもおもひ合すべし

あとはるかもなくの跡はふみたるあとなりはかは堪許等の字を用ひてそことはかり定るこさなきないふなり

ノ高イコトデヤガ。今カウ海邊近イ所ヘ雪ガフツテ。クルケシキハ白イ涙ガマコトニツノ末ノ松山ヲナコエルノカト見エル

餘材此ノ初句を末の松山のあたりの。浦と見たるはやひがことなり。この浦いいづくよまれ。海の浦なり

壬生忠岑

とよし野の山のしらら雪ふミ分て入にし人のおとづれもせぬ

○吉野山ハ深イ雪ヲフミ分テコモツタ人ガ。ソノ後一向ニオトヅレモナイガ。雪ガ段々ヲカウナツテ便リモシラレヌカ。イヨ〳〵無事ナガ寒氣ノツヨイトコロナレバコモシワヅラハ ナドハセヌカ。アンジラレ、ワイ

白雪のふりてつもれる山里ハすむ人さへや思ひきゆらん

○雪ノフツテ段々フカウツモツタ山里ハ。サヅヤ。寒ウハアラウ。サビシウ

アラウシサウ云所デハ。住デ居ル人マデガ。心ノキエイルヤウニ思フデガナアラウ。雪ハジマイニハ消ルモノデヤガ。ソノ雪ノヤウニサ心マデガ

雪のふるを見てよめる　凡河内みつね

雪ふりて人も通ハぬ道なれや跡はかもなく思ひきゆらん

○雪フリニカウシテ居ル我心ハ。タトヘバ此ノヤウニ雪ガフツテ。ニ人ドホリモタエテ。足跡モナウナツテソコト云筋モシレヌヤウニ消テシマウ道ノヤウナ物デヤヤラ。カウシテ居ル心ガキエルヤウナ。千秋云三の句のなれやと結伊のらんとのあつかひ。この歌をよく味ひてしるべし

雪のふりけるをよめる　清原ふかやぶ

冬ながら空より花のちりくるハ雲のあなたハ春にやあるらん

○マダ冬ナガラ空カラアノヤウニ花ノ散テクルハ。アノ雲ノアナタハモ

木の花のこゝろにて
木のさよりと云ふ

ウ春ヂヤカシラヌ

雪の木よりふりかゝれりけるをよめる　つらゆき

冬ごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける

○今マハ冬ガレ。デヤダメモデメアノ木ナレバ。思ヒガケモナイニ。枝ノアヒダカラ。花ノチルト見エルホドニサ。雪ガフルワイ

やまとの國よまかれりける時に雪のふりけるを見てよめる　坂上これのり

朝ぼらけ有明の月と見るまでによしの、里にふれる白雪

○カウ夜ノダワラリツトアケタ時ニ見レバテウド有明ノ月ノ殘ツタ影ト見エルホドニ吉野ノ里ヘ雪ガフツタ。千秋云朝ほるけのぼらけハ朋明のつゞまりたるなり集中戀三にしのゝめのほがらゝ

までは物をはかるにみまでりしてまでたはかりきはむろ曽にてバかりといふに同じとは月と見るバかりてふ言なりこれをこゝろ得たがひてこの歌をうす雪ぞなどゝ云はこゝの歌のついでをもしらぬ人のわざなり上下の歌ごもふかき雪をよめるをもへ

あまざるは蔦葉に天霧合ゆきはふりつゝなどよみて天ぐもりあひてふをいふなるをつゞめてあまざらひとも云なり霧にもみと明ゆけバと云ゝ是なり

題しらず　よゝ人しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞立かくみゆきまれにとそ見め

○此ノ雪ハマダキエヌウヘ、モ又ツヾイテフリカサナレ。オツ、ケ春ガキテ霞ノダツ時分ニナツタナラ。マレニコツフリモセウケレ。度々ハ見ラレマイホドニ

梅花うれとも見へず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝば

○あまざる雪ガオシナメテドコモカモフツタレバ。梅ノ花ガ梅ノ花ト見エヌ。同ジ白サヂヤニヨツテ

此歌にある人のいはくかきの本の人まろが歌なり

梅の花に雪のふれるをよめる

くもることなり秋霧などいふは歌とバのごとくにて古言にあらず

はしは詞のかきさまをよくみよこと〳〵ハ秋にも色こと〳〵にと云を新撰萬葉にハ色殊に深き春に同じく別にのなり意なりしかれバすみてよむべきを下なにとるハ言領なり

花の色ハ雪とまがへりて見へずとも香をだに白へ人のしるべく　小野たかむらの朝臣

○花ノ色ハ雪ニマガヘツテ。ソレト分レテ見エズトモ。人ガ梅ノ花ヲヤトシルヤウニセメテ香ナリトモ。ハツキリトシレルヤウニ。コホヘ

雪の中の梅ノ花をよめる　きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまがひせバたれかとゝ分てをらまし

○梅ノ花ハ色ハ白ウテ。雪ニマガウガ。モシ香マデガ。色ノヤウニツモツタ雪ニマガウナラバ。誰レガ雪ト梅花トヲヨウベツ〳〵ニ見分テ折ウツイ。香ガマガヘネバコソ

雪のふりけるを見てよめる　紀ともより

雪ふれバ木ごとに花ぞ咲まけるいづれを梅とわきてをらまし

○雪ガフレバ何ノ木モミナ花ノサイタヤウナウイ。ドレヲ梅ヂヤト見分ケコクイテ。ナラウソドウモ見分ケコクイ

物へまかりける人をまちてしいすのつもごりまつね　よめる

わがまたぬ年ハ來ぬれど冬草のかれにし人ハおとづれもせぬ

○コチガマチモセヌ來年ノ年ハモウ近ウキタケレドモ。今ジブンノ草ノヤウニカレテヨソヘインダ人ハ。コナガコレホド待ツノニ。マダカヘツテコヌノミナラズ。ネカラオヤヂレモセヌ。カレルト云ハヨソヘイテヨリツカヌヲヂヤゾイ

としのはてによめる　ありはらのもとかた

あらたまの年の終になるごとに雪もわが身もふりまさらまし

○雪ガフレバ何ノ木モミナ花ノサイタヤウナウイ。ドレヲ梅ヂヤト見分ケコクイテ。ナラウソドウモ見分ケコクイ

物へまかりける人をまちてしいすのつもごりまつね　よめる

わがまたぬ年ハ來ぬれど冬草のかれにし人ハおとづれもせぬ

○コチガマチモセヌ來年ノ年ハモウ近ウキタケレドモ。今ジブンノ草ノヤウニカレテヨソヘインダ人ハ。コナガコレホド待ツノニ。マダカヘツテコヌノミナラズ。ネカラオヤヂレモセヌ。カレルト云ハヨソヘイテヨリツカヌヲヂヤゾイ

としのはてによめる　ありはらのもとかた

あらたまの年の終になるごとに雪もわが身もふりまさ

跡るに枯るをよせた

論語に歳寒然後二知松柏一之後彫と云を用ゐてよめるなるべし

りける

○□年ノ終リニナルタビゴトニ雪モフリマサルガ。コチガ身モ段々フルサガマサッテサ。次第ニ年ガヨッテイク。アヽコマッタモノヂヤ

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　よミ人しらず

雪ふりて年の暮ぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見へけれ

○今マデ露ヤ霜ヤ時雨カフッテモ。松ハ色ガカハラナンダカ。ソレデモマダ此ウヘ。雪ガフッタラバ。モシ色ガカハルデモアラウカト思フタガ。今此ヤウニ雪ガフッテモ。ヤッハリ色ハカハラズニ。モウ年ガクレタカラハ。サテハ。トウ〳〵シドウ色ノカハラヌ松ヂヤト云フモコヽデコソ見エタモノナレ

としのくれてよめる　はるみちのつらき

飛鳥川ハあすと云かけてながるゝつゞけたるハ常のことなれどかくうるハしくいひながされたるハまれなり

ますかゞみハもと眞澄日の鏡へふ詞なはぶきていへり出雲の國ノ造が賀詞に麻曾日の大御鏡とあまてうせる日なといへり是古言なり

昨日といひけふとくらしつあすか川流れて早き月日なりけり

○昨日今日明日ト云テ一日〳〵トクラシテ。ツイモウ年ノクレニナッタヂヤ。アスカ川ノ氷ノ早ウ流レテユクヤウニ。アヽサテ〳〵早ウタツ月日ヂヤワイ

歌奉れとおほせられし時によみて奉れる　きのつらゆき

行年のをしへもあるかなます鏡見る影さへ暮ぬと思へば

○年ノツモルニシタガウテ。次第ニ鏡デ見ル影マデガ。ツムリガ眞ッ白ニナッテ面ハシワガヨッテ。此ノヤウニオイクレテイクト思ヘバ。サテ〳〵暮テユク年ガマアチシウ思ハルヽカナ

頭書　古今和歌集遠鏡卷之六　終

賀歌ハいはひうたとよむべし

千代とハ百を十合せたるのみに心得べからずかぎりなきを云にてよろづ代といふも同じ千万さもに實數と年數とのいひなしあり

數かぎりなき砂もて君が命に譬ふなり

しほの山ハ能登の國にあり

古今和歌集遠鏡　卷之七

頭書　古今和歌集遠鏡卷之七

賀歌

題しらず　よミ人しらず

我君ハ千世ニ八千世ニさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

○コマカイ石ガ。大キナ岩ホニナッテ苔ノハエルマデ。千年モ万年モ御繁昌デオイデナサレコチノ君ハ

わたつ海の濱のまさごとかぞへつゝ君が千年のあり數ニハせん

○海ノ濱ノ砂ノ數ヲダン〳〵ニカゾヘテ君ノ御長壽ノ御年ノ數取リコセウ

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をハ八千世とぞ鳴

まうけてよめるか

御歌とあれど古本御の字なし延五記といふものにもなし歌の體かならず御製にあらぬ遍昭のよめるならんか

○シホノ山ノサシデノ磯ニ住デ井ル千鳥ノ鳴クヲキケバ君ノ御代ヲバヤチヨ〳〵トサ鳴キマス

我よはひ君がやちよにとりそへてとゞめおきてい思ひ出よせよ

○ワレヲガ此長命ナヨハヒヲ。ソコモトヘ進ゼウホトニコレカラソコモトノ八千世ノヨハヒノ上へ。此ワレラガ齢モトリソヘテ。ソコモトニトドメオカレタラバ。後ニ思ヒダシグサニシテ。我ラガ子ヲ思ヒグサツシヤレ。打聞よろし餘材わろし

仁和御時僧正遍昭ょ七十の賀ゐひける時の御歌

かくしつゝとにもかくまもあがらへて君が八千世にあふよしもがな

朕モドウシテナリ共ニ長命デ居テ。此度ノトホリニ又イク度モ〳〵賓ナイハウテ進ジテ。ソコノ八千歳ノ賀ニドウゾ逢ウヤウニシタイナカナ

杖ハもはら山坂をこゆる料なれバ千年をこゆるといふを坂よよせたるなり捨まくによろづ世の坂ともよめり且杖といはで杖のことをいふなり舟といはで酒ともわたるともいふ類にていにしへの常なり

ちりかひハかれこれ散合すなりまくらをかハすなどいふにお

仁和のみかどのみこにおもしましける時に御をばの八十の賀ょまろかねと杖につくれりけるを見て彼御をばにかはりてよめる　僧正遍昭

御をばハ御祖母なるべし。おの假字を書べきなり

ちハやぶる神のきりけんつくからょ千年の坂もこえぬべうあり

此杖ハ下トホリノ物トハ見エヌ。大カタ神ノ御キリナサレタ杖デアラウ。然レバ此杖ヲツクカラシテハ。千年ノ坂マデモ。心ヤスウ越ラルヽデアラウト思ハル、

ほり川のおほいまうちぎみの四十の賀九條の家よてしける時によめる　在原業平朝臣

櫻花ちりかひ曇れおいらくのこんといふなる道まがふがょ

なほ老らくは老るのるを延ていふなり

貞辰皇子は清和天皇第七の皇子なり

龜の尾山龜山ともいふ大井河ハこのふもとを落るなり

四十ニ御ナリナサレタレバ。初老ト申シテコレカラ老ガコウト云ギヤガドウヅコヌヤウニシタイモノナレバ。ソノ老メガ來ル道ヲフミマヨフヤニ其用意ニ櫻花ヨタントナリアウテソコラガ。闇ウ曇ルヤウニセイ。ソシタラソレデ道ガクラウテ來ル老ガフミマヨウテ來マイホドニ。がよい萬葉よ多き詞なり。疑ひのか。よいあらず

さだときのそこのをびのよそぢの賀と大井にてきのこれをか

ちける日よめる

此をバも御祖母よておはなるべし

龜のをの山のいはねをとめて落る瀧のちら玉ちよの數かも

コノ大井ノ近所ヲ龜ノヲノ山ノ岩ノネニソウテオチル瀧ノ白玉ノ多イ數ハ御壽命ノ千年ノ數カヤレ。山ノ名サヘメデタイ龜山ナレヤ

さだやをのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりける御屏風よ櫻の花のちるをたに人の花見たるかたかけるをよめる　藤原興風

この歌賀に似ずといふ人ありすべて屏風の歌ハ繪のさまのみたよみていはふ心ハよまぬ只繪を本としてよむがいにしへなりあまりに賀にかゝハりてよむハあきたくみゆるものなり

かざしは枝を折て冠の巾子の右か左にさしものなり

いたづらに過る月日ハおもほへで花見てくらす春ぞすくなき

ナンニモナシニタヾ過テイク月日ハ。多イヤラスクナイヤラ。何ンニモ思ハズニウカ〳〵トシテクラスガ。此ヤウニ面白イ花ヲ見テクラス春ハヤキツウ日數ガスクナウ思ハル、。餘材よ春のすくなきよおぞろきて。思ヘバ過よし月日ハ多かりけりとはじめておほゆる意なるべしといへるハかなはず

もとやすのそこの七十の賀のうしろの屏風よよみてかきける　きのつらゆき

春くれバやとにまづさく梅の花君が千年のかざしとぞ見る

春ガクレバ此御庭ヘマヅ一バンニサク梅ノ花ヲ君ガ千年マデノ春ノ御カザシヤトサ存ジマスル

ためしは様の字と心得べし例の字は少したがへり

偽なきことを神はあきらかにしろしめすらんとと云ことなるをこゝにわが君のためと云をおもへバ神も即同ト心におぼすらんこふ意と聞ゆ

いにしへにありきあらまゝいまらねども千年のためし君に始めむ

素性法師

千年モイキタ人ハ。昔モアツタカナカツタカハシラヌケレドモ。タトヒ今マデニハサウ云人ハナイニモセヨ千年イキルタメシヲ君カラ始メナサルデアラウ

ふして思ひおきてかぞふる萬代い神ぞ君るらんわが君のため

吾君ノ御年ノ數ヲドウゾ万年マデモト。寐テモオキテモ願ヒマスルコトハ。人ノ力ニコソ及バズトモ。神ガ其通リニ御ハカラヒナサレウワサ我君ノタメニ

神ぞ君るらんい萬葉ま神しまらさんなどある類まて君るといはからひおこなふをいふなりたゞ常まいふ君るの意のみまいあらず

藤原三善か六十賀まよみける

つるかめも千年の後いしらぬくにあかぬ心にまかせはてらん

在原しげはる

鶴龜ハ千年ノヨハヒヲタモツ物ナレド。ソレモソノ千年ノ後ハドウアルヤラシラヌガ。貴様ハ千年ゴザッテモマダソレデハ十分ニハ存セヲバツノウ〜モマダ存分ニ長ク久シウ御無事デオキマセウ

此歌いある人在原ときはるのともいふ

よしみねのつねなりがよそぢの賀にむすめまかそせいはうし

いりのよみ侍ける

万代をまつまて君をいはひつる千年の陰まに住んおもへば

君ハ万年ノ御壽命ヲ待ッナレバ。ソノマット云名ノ松デヲ。オイハヒヤシマスル。サウシテソノ千年モアル松ノカゲニ鶴ノスムヤウニワタシモ君ノ千年ノオカゲヲ蒙リテ共ニ長ウ居マセウト存ジマスレハヲ。

今の本にはつねなりとあり世を也に見あやまりて寫せしなるべしこれは文德實錄三代實錄に所々見えたる人にて末に貞觀十七年五月十九日從四位行丹波守良峯經世卒としるせる人なり

わか草にわかきを云
ふ心をもて老を若か
へらす意にとれり

常に見る給のさまな
れバかくたくめり雲
ゐハたゝ雲の事をい
ひまた遠きことをも
いへりこゝは遠きこ

餘材よつるといふ辭ゑ鶴をもたせたりといへりまとゑ下の句のことば鶴
ゑよれりと聞ゑたり。

ないしのかミの右大將藤原朝臣の四十賀しける
時に四季のゑがけるうしろの屏風にかきたりけ
る歌

春日野にわかなつみつゝ万代をいはふ心ゝ神ぞしるら
む

御賀ノタメニカウ春日野デ。若菜ヲツミ〳〵心ノ内テ御壽命ヲ万年マ
デトオイハヒ申ス心願ノホドハ。御先祖ノ此春日ノ御神力ヲ御約受ナ
サレテ御守リナサルゝデゴザラウ。ゑるらんの意上ゑいへるが如し

山高み雲ゐゑ見ゆるさくら花心のゆきてをらぬ日ぞな
き

○高イ山デ雲ノアタリニ見エルアノ櫻ノ花ガキツウヨイ花ヂヤガ。山ガ

となり
家隆卿の筆なりと云
本によりて
名を擬ぐ六帖家の集
等にも見へて躬經の
歌なり次に是にならふ
ならなくにはならぬ
を延ていふなり
此ノ歌六帖家集家隆
卿本ともに友列の歌
なるをある說に貫之
なりといへるよりを
ころなし
六帖には素性とあれ
歌ざまかならず躬經
にてしかも家集家隆
卿の本にもいちトる
きなり

高サニドウモアソコヘハエイカチハ。アヽドウゲ一枝折テキタイ物ヂ
ヤト思ウ心ガ。毎日アノ山ヘイテアノ櫻チララヌ日ハナヽ

夏

めづらしき聲ならなくに時鳥こゝらの年をあかぎもあ
るかな

イツノ年モ同ジ聲デナケレバ。ナニモメヅラシイ聲デハナイニ。アノ郭
公ハオホクノ年毎年聞テモサテモ〳〵マア聞アカヌワカナ。打聞こゝ
ちの說わろし

秋

をみの江の松を秋風吹からにこゑ打そふるおきつ浪ら

○住ノ江ノ松ヲ秋風ガサア、トフクトソノマヽ。ドオヽト浪ノ音ヲウヤ
ツヘル

千鳥なくさほの川霧立ぬらじ山の木葉も色まさりゆく

六帖家集家隆卿の本にも忍みねの歌と見えたり

家集拾遺家隆卿本にも貫之なり末の句いかにもかの人の口つきなり

延喜第二の皇子保明（やすあきら）の太子なり

佐保山ノ木ノ葉モ段々色カマサッテキタ。此ト、ホリナレバ今マデニモウ

㊀此佐保川ノ霞カタツタサウナ。千秋云○霞時雨のみならず霧にも木ノ葉ハ色づく物なる故に○かくよめり、

秋くれば色もかはらぬときわ山よその紅葉を風ぞかしける

○秋ニナッテモ木ノ葉ノ色ノカハラヌト云。常磐山ヂヤニヨッテ此山ニハ紅葉ハナイニヨッノ山ノ紅葉ヲ風ガ吹テ來テサ。此ノキハ山ヘ借スワイ

冬

しら雪のふりしく時わみよしのゝ山下風に花ぞちりける

○此吉野ノアタリヘドコモカモ白イ雪ガフッタ時ニハ。山ノ風デ麓ハ花ガサ散ッワイ

春宮のうまれ給へりける時にまゐりてよめる　典侍藤原よるかの朝臣

峰高き春日の山ゐづる日のくもる時なくてらすべらなり

○春日神ノ御末ノ藤原氏ノ中デモ此上ヘモナイ御方ノ姫君ノ御腹ニデキマシナサッタ若君樣ナレバ。テウドソノ春日山ノ高ウウチハレテ曇所（くもり）ノナイヤウニ御行末イツマデモ。クモリナウ天下ヲ御照シアソバスデアラウト存ジラレマス

頭書　古今和歌集遠鏡卷之七　終

文徳實録齊衡二年正月從四位下在原朝臣行平爲二因幡守一云〻この度の歌なり

すがるは日本紀に螽（くわ）蝗（ら）とかきてすがるとよめり一には似我蜂（じがはち）とも云ふこの歌何ともしらねバ萩原といふにつきてはすがるは鹿のことなりなど

頭書

古今和歌集遠鏡卷之八

離別歌

題しらず　在原行平朝臣

立わかれいなばの山の峰におふるまつとしきかバ今かへりこむ

○今此方（このかた）ハ京ヲ立テ別レテ因幡國ヘ下ルコ。其國ノイナバ山ノ峯ニハエテ松ノ名ノトホリニ。ソナタガ此方（コノホウ）ヲ待ツト聞タナラ。ヂキニ又カヘツテコウワサテ

よみ人しらず

すがるなく秋の萩ゝら朝たちて旅行く人をいつとり待（また）む

○朝立旅ヘユク人ニ□萩ノ咲テアル此秋ノ野デ今ワカレルガ。オカヘリチバイツト思ウテマタウヅ。ソレヤキツウ遠イ〻デアラウ。打聞すが

あたらぬ説をもいへり萩原はこのわかれ秋なれバをりからのけしきをもて歌のあやとなすなり

たちちねは母といふへき冠辭なりこゝにおやといへるは本ハ母の字なりけんをい

るおくの眺うけがたし

かぎりなき雲ゐのよそゝわかるとも人を心ゝおくらさむやハ

○今カウ別レテ限リモナイ遠イ。雲ヨリアチラノ國ヘワシハイクヂヤガソレデモ此故郷ノ人ノ事ハ常住忘レルマモナシニ思ウテ行ウヂヤニヨッテ。心ノ内ハドコマデモイウシヨニツレタツテイクモ同ジコヂヤソサ。身コッカウシテ今別ルレ心ノ内デハ。貴樣タチチアトヘ殘シテオカウカイ。心デハツレダッテイクワサテ。打開結句の説いとわろし。餘材よろし

をのゝちふるがみちのくのすけゝよりける時ゝ

いはのよめる

たらちねのおやのまもりとあひろふる心ばかりハ關をとがめろ

今日別れてあすハあふといひかけたり

かへる山ハ越前國敦賀か郡にあり本ハ加比留山なるを歌のよせにてかへる山といへ

○ソナタノ身ノ守リヂヤト思ウテ。濡テヤル此母ガ心バカリヲバユサウノ關所〳〵デモドウゾトメテ下サルナ。トホシテヤッテ下サレ

さだときのみこの家ゝてふぢいらのきよふが近江のすけゝよまかりける時ゝうまのはなむけしけるよめる

きのとしさだ

けふわかれあすハいかうみと思へども夜やふけぬらん袖の露けき

○今日別レテ明日ハヂキニ又アハレルホド近イ近江國ヂヤトハ思ヘドモカヘッタモノヂ別レトイヘバ悲シイ。アヽ夜ガイカウフケタヤテ。袖ガ霧デヌレタワイ。イヤ〳〵コレヤ。涙ヂヤワイ

こゝへまかりける人ゝよみてつかハしける

かへる山ありとハ聞ど春霞たちわかれなバ戀しかるべ

るなり春がすみハこの時春にて時のものをもて立といハん冠辭にあやなせしなるべし

これもしら露ハ立といはん冠のみさて四の句六帖にハ立わかれなバ見えたり

ばやことは上にもいふ如く思へバかねて戀しきやと濕得べし

し

○北國ニハカヘル山ト云山ガアルト云フナレバ其名ノトホリニオツヽケ御無事デカヘラッシヤラウトハ思ヘド。ソレデアノ霞ノ立テアル方ヘ立テ別レテイカシヤッタナラバ戀シカラウ

人のうまれはなむけにてよめる　きのつらゆき

としむから戀しきものをおもふ雲の立なん後ハ何ごゝちせむ

○ナゴリチヨウ思ヘバ。マダタヽッシヤラヌウチカラ此ヤウニ戀シイ物ヲ

三立テイカシヤッタアトデハ。ドノヤウナコヽチガスルデアラウ

ともだちの人の國へまかりけるによめる　在原おぢはる

わかれていはどをへだつと思へはやかつ見ながらにかねて戀しき

○別レテカラハ遠イ道ヲヘダテヽ。久シウアハレヌフギヤト思ウユヱカシテ。マダカウシテ見テ居ナガラ。カタ一方デハ。ハヤ今カラモウ戀シウ思ハル、

あづまのかたへまかりける人によみてつかはし　いかこのあつゆき

ける

思へども身をわけねばめに見へぬ心を君よたぐへてぞやる

○ナンバウカナゴリチシウ思ヘドモ。人ノ身ハ二ツニ分ラレヌ物デドウモツイテハエイカネバ。目ニハ見エヌケレド。心ナサ其方ヘソハセテヤリマス

相坂にて人をわかれける時によめる

相坂の關より東の國なあづまの國といへり

思へどもと初にいふハ心ふかき詞なり思へどもゝといふ意なりといふ說ハさもありぬべし

相坂山ハ東へ下る人をバ京よりこゝまで

送りてこゝまて別る〻所なりいにしへ關ありし山なり旅人ハこゝにて道の神にたむけすれバ手向山ともいへり

から衣ハ冠ッ云のみ朝露も冠ながらやがてそのよせ有詞にてそも消ぬべし云この頃のさまなり

千秋云。人をわかるといふも。人にわかるといふと同じことなり。しかるを打聞に。人の旅行に別る〻にハ。人〻をといひ。我行ゞにハ。人にわかるといふといへるハあたらぬ。萬葉集に。くやしく妹をわかれ來にけり。又たちねの母を別れてまことわれ旅のかりほにやすくねんかも。これらわがゆくときの別れなり

あふ坂の關しまさしき物ならバあかぎ別るゝ君をとゞめよ

なゝのよろづと

○アフ坂ト云ガマサシク其ノ名ノ通リチガヒナイ物ナラバ。人ニ逢ウハズヂヤ。別レウハズハナイ。スレヤ殘リ。多イニ別レテユク此人ヲ。アヒカハラズ逢ウヤウニコノ關デトヾメヨ。餘材まさしきといへるよかなはず千秋云○餘抄ハ關といへる詞になづみて○二三の句を說たれども。關にて人をとゞむるハ常のことなるを。まさしきものならバなどことゝしくいふべきにあらぬ

題しらず

よゝ人しらぎ

かゝ衣たつ日ハきかじ朝露のおきてしゆけバけぬべき物を

○二御立ナ日ヲバ明日ヂヤト云フ。ワシヤモウ聞キマスマイ。ワシヤステヽオイテ御出ナサルヿナラバ。明日御立ヂヤト聞テハ。明日ノ朝ニナッテナラ。ワシヤモウ露ノキエルヤウニアラウニアラウト存ジマスモノ

此歌ハある人つかさを給ハりてあたらしきめよつきて年へてすみける人をすてゝたゞ明日んなたつとバかりいへりける時よともかうしいはでよみてつかはしける

ひたちへまかりける時にふぢハらのきみとしよ

よみてつかハくしける

寵

あさなげよ見べき君とし賴まねバ思ひたちぬるくさ枕

なり

○毎日アハレル公利樣ヂヤトハ賴マレヌ。ミヅクサイ御心ナレバ。ワレユエワシヤ存ジ。立ッテ常陸ヘ下リマスル今度ノ旅デゴザリマ、

きのむねさだがあづまへまかりける時に人の家よりつき出たつとてまかりまうしたけれバ

やどりてわかつき出たつとてまかりまうしたけれバ

是にきみとしの名と常陸國の名をよみ入りたると雖もいへり然ハ物の名俳諧この部に入べきを彼から衣きつ〻馴にしの歌を旅の部にへしかバ是もさる意にて別レをむねくしてこゝにハ入しなり

人の家にやどるハ方たがへのためにやとれるなるべし

これハ戀の部に入べきにかくハ端書にまかせてこゝにハ入たるにや

六帖には二の句ふかきこゝろのことありあしき歌

にや女のよみていだせりける

よみ人しらず

えろしらぬ今心みよ命あらば我や忘るゝ君やといねぬと

○オマヘハワタシヲイツマデモ忘レハセヌトオッシャルケレドモ。ワシハドウモソレハサ。エガテンセヌ。表デワシガ忘レルカ。オマヘガ忘レテドウデ下サレヌカハ。命ガアッテイキテ居タナラ。オッツケ知レウホドコタメシテエラウジョ。ワシハオマヘヲイツマデモワスレハスマイカ。オマヘハ追ツ付ケワタシヲバ御忘レナサルデアラウワサ

あひしりて侍ける人のあづまのかたへまかりけるをおくるとてよめる

ふかやぶ

雲ゐるも通ふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりあり

てゝにもいせ物がたりにもみちの奥さかけるハその頃のならはし言によろしからず是はみちのおくの國と云其おくの松を

○貴樣ガ今度ドレホド遠イ所ヘイカシヤッテモ。拙者ガ心ハ。イツモソノ貴樣ノ方ヘカヨウテ。コヽニ殘ッテ居ネバ。ヒッキャウ此ノ身ガ。今別レテアトニ殘ルト見ラレルバカリヂヤ。心ハ別レハセヌ

友のあづまへまかりける時によめる

よしとかのひでとか

白雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくだく旅かな

○雲ノアチコチヘ分レテイクヤウニ。今度遠イ間タヂヘダテヽ別レル悲シサニ。今ハナムケニ進ズル此ノ手向ノ麻ノコヤカナヤウニ拙者ハイロ〳〵ニ心ヲクダイテ。サテ〳〵ヲシイ御旅立デゴザルワカナ。千秋云。ぬさとて。五色の絹などをこまかにきりて。袋にいれて道の神に。手向の料に。旅たつ人にをくるとあり。ぬさ袋といふこれなり

ちのくにへまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

ふる雲の八重にかさなるをちにても思はん人に心へだ

はゞ岩きてみちのくの國といへるなりみちの國とてはあまり岩き過てあやまれるなり

こしの國は越前をいふとみゆるゝかの加比留山あれはなり

つな

○ハルカニ雲ノイクヘモヘダヽツテアルアナラノ國テアラウトモ。拙者ハ貴樣ノ事ヲタエズ思ウテ居ヤウホドニ。タトヒ雲ハヘダテルトモ。心ハヘダテサッシヤルナヤ

人をわかれける時によみける

わかれてふとゝ色よもあらなくに心よしみてわびしからるらん

○色コソ物ニシム物ナレ。別レト云フハ色デモナイニ。ドウ云コトデ此ヤウニ心ニシミ〻トッラウ思ハレルヤラ

あひしれりける人のこしの國にまかりて年へて京にまうできて又かへりける時によめる　凡河内躬恒

かへる山なにぞゝ有てあるかひゝ來てもとまらぬ名に

こそありけれ

○貴樣ノ又下ラッシヤル國ヘアル山ハ。ソヘイタ人ノカヘルト云名ヂヤト思ウタニ。ソノカヘル山ハ。何ンノヤクニタッテゾ。サウ云ッ山ガ有テモアルカヒハナイ。アルカヒト云ハ。久シブリデ來テモ。京ニハ居トマラズニ。又アチヘカヘルト云名デコソアレ

こしの國へまかりける人によみてつかはしける

よそにのみこひやわたらん白山のゆき見るべくもあらぬ我身ゝ

○今カラハロソコバッカリオナツカシウ思ウテ。月日ヲタテルデゴザラウカ。アノハウヘ恭ッテ御目ニカヽラシウモ思ハレヒワルガ身ナレバ。

ゆきて見るといふとを白山の雪を見るといひかけたり

おとは山のはとりにて人とわかるとてよめる　つらゆき

しら山は越前にあり

此別れを嘆のをしむがごとく聞えてたかく鳴と云てさて我をしむ心よりさりの鳴もひとつこゝろにこ

ことゝ聞ゆるとはいはで時鳥にのみおほせたるいにしへのさるなり此意をおもひえぬ人はこの類をは云たらぬやうに思へり

虫ハ秋のわかれをしむ人は人の別レをおしむをかねていへり

おとゝ山とだかく鳴て時鳥君が別れと惜むべうなり

○コノオトハ山ノ高イ木ノ上ヘデアレホトトギスガ高ウ鳴キマス郭公モアノトホリ鳴テ貴樣ノ御別レヲナゴリ。チシウ思ウテアラウサウ聞エル。抽者ドモ、同シコサ

ふぢいらのゝちかげがから物のつかひはなが月
のつごもりかたはまかりけるようへのおのこと
もさけたうびけるついでによめる

ふぢはらのかねもち

もろともに鳴てとゞめよきり〴〵す秋の別れを惜くやいあらぬ

○トモ〴〵ニ鳴テドウゾオトメ申セキリ〴〵スヨ。今ハ秋別レノ時分ニオワカレ申スヘ。コレホドナゴリヲシイニ。ソチハナゴリヲシウハナイカイ

平ものり

唐ものしらへの役に仰付られて西國へ

しろめは大和物がたりに源の告がむすめ又ハ津ノ國江口の遊女なりといへり大鏡にていじのゐんの阿じりにおはしましにしろといふあそびものめして歌よませられしことあり萬葉にも遊女のよき人のまへいでゝよめる歌多し後にも一條院のて

秋霧のともに立出て別れなばはれぬ思ひにこひやわたらん

○アノ霧ノ立ツヤウニ貴樣モ共ニ立テ出テイカシヤッテ御別レ申ベタナラワシハ今カラハアノ霧ノハレヌヤウニ。心ガハレヌ。イッモオナッカシウ思ッテタテルデゴザラウカイ

源さねがつくしへゆあとんとてまかりける時に
やまざきにてわかれをしみけるところまてよめる

ふろめ

命だに心にかなふ物ならば何かわかれの かなしからまし

○命サヘ心マカセニナッテ。死ナズニ居ラルヽモノナラ。ナニガサテ御別レ申スガコレホドニ悲シカラウゾイ。人ノ命ハ御歸ノ時分マデノコトモ知レヌコヨッテサ。悲シイワイノ

ろまでもさることを見ゆ後ノ世のあそびとハいと異なり

大かたはおほよそといふにおカトいざはすめる詞なりそれから人をいざなふともいひてこゝはおくりの人〳〵とともにといふ意となれり

山さきより神おびのもりまでおくりゝ人〳〵まかりてかへりがてにして別れをしみけるよよめる

ゑなもとのさね

人やりの道ならなくに大かたいきうしといひていざ歸りなん

○人ノサセル旅デハナイ我心カライク旅ヂヤコ。タイガイナラモウイキトモナイト云テ。ドレヤカヘラウヅ

いまいこれよりかへりねとさねがいひけるをり

藤原ノかねもち

よよとけるたれてきゝし心の身ゝしあれゞがへるさまよい道もしられぬ

○ドコマデモイッショニイキタイトシジハレテ。コレマデキタ心ニ着イテアル我身ヂヤニソノ心ヂドコマデモ貫様ニツキソウテノ泰レバ。コレカラ歸ルトキニハ此ノ身ハ心トハナレテ心ノナイヌケガラヂヤニヨッテ。カヘリシナニハ道モエシリマセヌ

藤原これとかゞむさしのすけゝまかりける時ゝれくりゝ相坂とこゆとてよよとけるつらゆき

かつこえて別れも行かあふ坂ハ人だのめなる名にこそ有けれ

○此ノ坂ハ逢坂ナレバ人ニ逢ウハズヂヤニ。此坂ヲコエツヽソシテマア別レテイカッシヤルコカ。コレデハ逢フ坂ト云名ハ。頼モシサウニ聞エテ頼ミニナラヌヲ名ヂヤワイノ。コレガ人タノメト云モノヂヤ。人ダノメトハ人ニ頼モシウ思ハセテオイテ。ソシテ其通リデモナウテムダナ事ヲ云ヒマス。千秋云。かつとは。逢坂をこえながらかつわかれゆくかといへる意にて逢と別るゝと。まじへることにいへることばなり

おほなえのちふるがこしへまかりけるうまのはなむけによめる

藤原ノかねすけの朝臣

かつハ物ふたつの間におく詞なりあゝはあふと別の間ニ用ゐたり

仕官の人ハ私に行が

たき故にその時にのぞみてひとへにかくゝは思ふなり

花山はみやこの東の山科にて遍昭のそこに住てれしこと上にいへり

寺の名は元慶寺といへり

ならん上のなはねをかよはし下のなハ云ヒおさふる詞にて見られねなど云意なりなんいにしへはなもといへりむもものたゝそへたるのみにてなといひおさふるなり

君が行こしのゝら山しらねどもゆきのまに〳〵跡ハ尋ねん

○貴様ノ下ラッシャル北國ノ道ハ拙者ハ不案内ナレドモ。白山ハモトロリノ。惣体雪ノ深イ國ザヤト云フナレバ。貴様ノトホッテイカッシャツタツノ雪ノ跡ヲタヅネテ拙者モアトカラ參ラウ

人の花山よりでて夕さりつかたかへりなむとしける時よよめる　僧正遍昭

夕くれの離れ山と見るならんよるいとゝしと宿りとるべく

○夕カタノ此庭ノマガキハ。山ト見エレバヨイニ。サウシタナラ。夜ハドウモ山ハコエシレマイト思ウテ。アノイヤル人モ。コヨヒハコヽデトマルヤウニ

山にのぼりてまうでへりてきて人〳〵別けるついで

山といへるは比叡山なりてのころは日枝の延暦寺を山といひ三井の圓城寺を寺とのみいひならへり

比枝の山の舍利會に雪林院の皇子のぼり給ひてかへりけるとき心得べし舍利會のこと三代實錄の貞觀八年六月にくはし

よよめる　幽仙法師

わかれをゝ山の櫻にまかせてんとめんとめじゝ花のまよ〳〵

○サテカウ御別レ申スハキッウ御殘念ナガ。ト云テ拙僧ガナンボオトメ申シタトテトマリハナサレマイホドニ。コレハナンデモコノ山ノ櫻ニウチマカセテ。トメウ所トメマイ所。アノ花シダイニ致サウワイ。オノ〳〵ガタヨモヤ。アノ花ヲフリモギッテエカヘリハナサルマイワサテ

うりんゐんのみとの舍利會よ山よのぼりてかへりけるに櫻の花の本にてよめる　僧正へんぜう

山風に櫻吹まきみだれなん花のまぎれよ立とまるべく

○山風ニ此櫻ノ花ヲ吹卷テチリミダレヨカシ。ソシタラ此花ノチリミダレルノニマギレテ。カヘル道ガシレヌト云テ。君ガオ〳〵マリナサル

秋に遷昭の里ハあれてとよみしハ同じなるへし

ヤウ

清

ことならば君とまるべくにほいなんかへすい花のうき
にやいあらぬ

幽仙法師

○トテモ見事ニ咲ホドナラバ。君ノ殘リ多ウ思召テオトマリナサルヤウニ咲タガヨイ。ソレニ君ヲオカヘシ申ノハ花ノキコエヌノデハナイカ

花ノキコエヌノデハワタクシオカヘシ申サウヤウハナイワサテ結句又花ヨソチガタメニモウイフデハナイカ。ソチガタメニモウイフギヤワサテ

仁和のミかどとこにおはしましける時によるの瀧御らんじよおぼしましてかへり給ひけるによめる

兼藝法師

わかすして別るゝ涙たきにそふ水まさるとや下ゝ見ゆらむ

う

大御酒のさかづきをとりてこの歌あるハかれみの王へさかづきをさすとてうたへる歌なりいせ物がたりにも狩して天の河にいたるといふ意をよみて杯はさせとあり

しぐれゝ秋の末よりふる雨れバかくよみて雨の詞にてたへた

○ノコリ多ウテ御別レ申ス拙僧ガ此涙ガ瀧ニソウテ流レル。コレデハ川下デハ。水ガマシタト見エルデガナアラウ

かむなりきつぼにめしたりける日おほミきなどたうべて雨のいたうふりければゆふさりまで侍りてまかり出侍りけるとりにさかづきをとりて

つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばとしてをしとこそおもへ

○アノ萩ノ花ヲコノ雨ニヌラシテシヲラカシテシマウノハ。キツウ惜ウ思ヒマスレドモマダソレヨリモ貴様ノ此雨ニヌレテ御歸ナサルコ御別レ申スノガサテ。ナホサラ御名殘ヲシイフデヤト存ジラレマスワイノ。マアマヒトツアガリマセ。ソノウチニ雨モヤミマセウワサ

とよめりけるかへし

兼覽王

り

はし書に初めてとあるをよくむかへて見るべし

をしむらん人の心をさらぬまに秋のさぐれと身ぞふりまける

○ソノヤウニ別レテ惜ンデ拙者ヲ御深切ニ思ウテ下サレウトハ今日マデ夢ニモ存ゼナンダ。サウシタ貴様ノ御志ヲマダ存ゼナンダウチニ。拙者ガ身ハ。此萩ノ時雨ノフルト云ヤウニ落ウナツテモウラチノアカヌ物ニナリマシタ。マツト早ウ若イウチニ其御志ヲ知ツタラ。別シテ大慶ニゴザラウニア、殘念ナ

かねみのおぼきをはじめて物がたりして別れける時によめる　みつね

別るれどうれしくもあるかとよひより逢見ぬさきは何と戀まく

○御別レ申スハナゴリナシウハアレド。サテ〳〵マア嬉シイワカナ。ナゼニト申スニ今夜ヨリサキ。イマダ御近付キニナラナンダウチニハ。何ヲオナツカシウハ思ヒマセウゾ。今夜始メテ御近付キニナリマシタレバコソ。御別レ申スナレ。スレヤ別レノナゴリヲシウ思ハレルヤウニ御近付ニナツタ所ガナンボウカ嬉シイワギヤワサテ

題しらず　よみ人しらず

わかずして別るゝ袖のさら玉ゝ君が形見とつゝみてぞゆく

○ノコリ多ウテ別レル袖ノ涙ハトントト玉ノヤウニ落ルガ。此ノ玉ヲバソコモトノ形見ギヤト存ジテ即チ此袖ニツヽンデ參ル

かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖いかばかじ逢んと日を

そぼちはそぼゝれそぼふるなどゝ云におなじくしをれひづをつゞめていふ詞なり

○此別レヲナンボウカ悲シウ思ウテ此ヤウニ泣ク涙ニヒツタリトヌレクコノ袖ハ。又逢フ日マデハ乾キハスマイ。ナゼニト云ニ。コレホドニ悲シウ思ウワギヤニヨツテ。イツマデモ忘レラレマイホドニイツヲ限リト

との歌ハ旅のわかれにはあらじとみゆぬれ衣ハいつはりてふるにぬれりてゝも雨にことよせてとゞむるハ偽なるに近し

しひてハ強の字の意にてあながちにわかれ行人のゝうにうらみていふなり

石井は山路の岩あるところに清水のたゝへてあるを云ッ是をいしゐとよむハいにしへしならぬ人の

云フ。モナウ泣テヌラブノデアラウニヨッテサ清

かきくれしとゝふらなん春雨ハぬれぎぬきせて君をとゞめん

○コノ春雨ハトテモフルホドナラバ。マックラニナッテマッツトッヨウフッタガヨイ。ソシタラ此雨ヲイヒタテニシテ別レテイク君ヲトメウニ

おひて行人をとゞめん櫻花いづれを道とまどふ迄ちれ

○ナンボトメテモトマラズニシヒテ別レテイク人ヲトメウニ。櫻花ヨ道ノシレヌヤウニチットウヅンデ。ドレガ道ヂヤトアノ人ノ迷ッテエユカヌホトチッテクレイ

おがの山こえにていしゐのもとにて物いひける人のわかれけるをりよめる

つらゆき

つしあやまれるなり石なも古語ハ多くいはさよむてさ多し物いひけろ人さハ男をちにいふ詞にあらぬハ例なりこのわかれもしたしかりし女なるべし

物いひつきてハ人してその車にものをいへるなり。

下の帶は裝束の下に着たるものゝ紐を云いにしへ帶と紐とかよはしていへりさてこれハ道をへたてゝ下の帶とわかるとつゞく隔句體なり

むすぶ手のしづくに濁るの井の組ありても人に別れぬるかな

○物体コノヤウナ山ノシミヅハ。濁イモノヂヤニヨッテ。飲ウト思ウテスクヘバ。ソノ手カラ落ルシヅクヂギニ濁ルニヨッテ。オモウヤウニスクウテノマレヌ飲タラヌモノヂヤガ。テウドソノ通リニ。サテ〳〵マア殘リオホイニアノ人ニワカレタコトカナ清

道よあへりける人のくるまに物をいひつきてわかれけるところにてよめる

とものり

下の帶のもちいかたゝわかるとも行めぐりても逢んとぞ思ふ

○帶ヲスルニ。ウシロヘアテタ所デハ。端ノカタ兩方ヘワカレルケレドモ。前ヘマハシテムスブトコロデハ。又イキアウモノヂヤガ。ソノ通リニ

今イク道ハカウベツ〳〵ニワカレテ立クトモマタソノウチドウシテナリトモ。出合當ワサテ

頭書 古今和歌集遠鏡卷之八 終

土佐日記に朝州の津にてよめるよしをいひしるせうたも春海原さ有バ一の歌なりけんを海路にて時にかなへれバうれを用ゐたるなるべしこゝハもろこしの京にてもいづこにてもよめるてふ意にてかゝかもしものなり

頭書 古今和歌集遠鏡卷之第九

羇旅歌

もろこしにて月を見てよめる　安倍仲麿

天の原ふりさけ見れバ春日なる三笠の山に出し月かも

○今カウ空チヅヽトハルカニ見渡セバ。アレ〳〵。海ノ上ヘ月ガデタアヽ、アノ月ハ。故郷ノ三笠山ヘ出タ月デアラウカイマア。

此歌はむかしあかまろをもろこしに物おらハしに遣はしたりけるにあまたのとしをへてえかへりまうでこざりけるを此ノ國より又つかひまかりいたりけるにたぐひてまうできあんとて出たりけるにめいしうといふところのうみべにてかの國の今のはあむけしけりよるにありて月のいとおもしろくさし出たりけるを見てよめるとあんかたりつたふる

墓の流されしことハ仁明天皇明和五年な

わたの糸わたのいとハ海のとなり原ハひろく平かなるを元即海原といふに同じ

今日三日と見るべかりすこの所ハ奈良より半日バかりの程なれバくるみると心得べきと雖にもいへり

おきの國にながされける時に船にのりて出たつとて京なる人のもとよつかはしける　小野たかむらの朝臣

清わたの原八十島かけてこぎ出ぬと人にハつげよ海士の釣舟

○ユクサキハイクラモナク段々ニアマタアル島々ヲ過テイクベキ海上ヘ今マ出船シタト云ツテ。故郷ノ人ニハシラシテクレイ。コレアノアナヘ歸ツテイクアマノ釣舟ヨ。餘材結句ノ説わろし。

題しらず　よみ人しらず

みやこ出てけふみかの原いづみ川々風寒しころもかせやま

○今日京ヲ出テ此ミカノ原ヘキテアノ向ヒニ見エル山ハ。鹿背山ヂヤガ此イヅミ川ノ川風ガキツウ寒イニ。アノカセ山ヨオレニキルモノヲ一ツ借セ山。

千秋云。二の句のいひかけ。鹿背山を見とのいひかけなり。四ハそのこゝろなり。

ほのぐとあかしの浦の朝ぎりに島かくれ行ふね をしぞおもふ

○夜ノウスクトアケテクル時分ニ。海上カラ見レバアノ向ヒナ明石ノ浦ガ。朝ギリデカクレテ見エヌヤウニナツテイクアノケシキヲ遠ウヨツニ見テ過テイク。此船中ノ心ハサテモ〳〵心ボソイモノガナシイヂヤ。

此ノ歌はある人のいはくかきのもとの人まろがあり

此ノ歌は。打聞に出されたるごとく。今昔物語に。小野ノ篁ノ卿の歌とてのせたるそよろしかるべき。　但し明石にて海をながめてよめるとあるは。下ノ句を心得あやまりておしあてにいへる詞なり。今昔物語古本。廿四の卷に出たり。餘材四の句の説たがへり。すべて島がくれといふとをしゞ思ふハをしむとにあらず下の業平のハるゝ〳〵きぬる旅をしゞ思ふとよみるに同じ〳〵志ハ助語にて旅をゞおもふなりゞれハ京にありわびてあづまへ〳〵だるものゝうさを思ふなりこれハその島かくれ行舟をわが身つみてあハれとおもふなり

万葉に人まろの西の國へ行時と見たる歌にともし火の明石のおどに入日にやこぎわかれなん家のあたり見てといへるこそその國の國なれほの

〳〵ちかしとつゞくるハ今の京このかたのことバなり

この集の場書ハ短くかけるをむねとせしに業平の歌いへバ詞長しよりて思ふにハこの集せ物がたりハこの集の歌を專ラとりてそれに詞を多くハへあるひハ雪人などせしる物なるを顯昭などハかの物がたりハこの集の前のものと思ひたる心得たがひたるハ物を候として後にハ此せ集にハ物がたりをとりて此集にハ長注せしにあらずやたに長大和ものあるハものを詞をもて後にかきハへしと見ふるも多し

を、よく解得たる人あし。島かくれとは。海をへだてたるところの。かくれて見えぬをいへり。かあらずしも島にはかぎらず。これこの歌にては朝霧にかくれて明石の浦の見えぬを。海の沖よりいへるなり。

千秋云。島がくれゆく舟とは。船の島がくれ行如く聞ゆれど。さにはあらず。朝ぎりに明石の浦のかくれゆくを。見つゝゆく舟といふ意なり。この所むかしより人みなまどへり

あづまのかたへ友とする人ひとり。ふたりいざなひていきけり三河國八ッ橋といふところにいたれりけるにうの川のほとりにかきつばたいとおもしろくさけりけるを見て木の蔭におりゐてかきつばたといふいつもじをくのかしらにすゑて旅の心をよまんとてよめる　在原業平朝臣

きつゝなれにしつましあれバはるゞゝきぬる旅をしぞ思ふ

○日きつゝ故郷ニナジンダ妻ガアレバ。別レテハルゝゝト來タコノ旅ガサコ、ロボソウ物ガナシウ思ハル、

むさしの國とさもつふさの國との中にあるすみだ川のほとりにいたりてみやこのいと戀しうおぼえけれバさぼし川のほとりにをりいて思ひやればかぎりなくとほくもきにけるかなとおもひわびなてがめをるにわたしもりはや舟にのれ日もくれぬといひけれバ船にのりて渡らんとするにみな人ものわびしくて京におもふ人なくしもあらずさるをりゝ白き鳥のはしとあしがとあかき川のほとりにあうひけり京にハ見えぬ鳥なりければみな人見さらず渡し守にこれは何鳥ぞと〳〵ひければこれなんみやこ鳥といひけるを聞てよめる

名にしおはゞいざとことはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

角田川これによれバ武蔵と下總の間にて今ハこすげと云ふところに本ゝすみた川と云ありうこなるべし今すみだ川と云ハ後にもてつけたるなり遠き國なれバ京にて聞あやまりてかけるならん。

みやこ鳥ハ鷗のことなりみやこ人によせていふのみ

ありやなしやハ生死のとなり捨遺集にも生死のとをしかよめる歌見ゆ

この注は後に大和物がたりなどをとりあせはてかき入しなり

○都ト云フチ名ニツイテ居ルナラバ。定メテ京ノフチヨウ。知テ居ルデアラウホドニ。ドレヤモノトハウ都鳥ヨ。コナガ思ウ人ハ無事デサルカドウヂヤ。

題志らず　よみ人志らず

北へ行雁ぞなくなるつれてこし數はたらでぞゆくべらなる

○北ノ方ヘイヌル雁ガサアレマア鳴クワイノ。ワシバカリカト思ヘバアノ雁モツレダツテキタ友ノ數ハタラヌヤウニナツテサ歸ルデアラウ。ソレデアノヤウニ泣テイヌルト見エル。

此歌はある人男女もろともに人の國へまかりけりをとこまかりいたりてすゐはちみまかりにければ女ひとり京へかへりける道に歸ル雁の鳴けるを聞てよめるとおんいふ。

あづまのかたより京へまうでくとて道にてよめる

これは父か夫かなどの東國の住にてくだるにしたがひてゆきしが今かへるにいつしかとなつかしまるゝ京のかたの山ゝを霞のかくすを恨しなるべしはじめてのぼらん人のかくまでうらむべきにあらず

山かくす春の霞ぞうらめしきいづれみやこのさかひなるらん

おと

○ドノアタリガ京ヂカクノ山ヂヤラ。片時モ早ウカヘリタウ思ヘバモウ京ノ山ガ見エルカ〳〵ト氣ヲ付テ見ルケレド。ドレヂヤラシレヌアノヤウニ山ヲカクシテハツキリト見セヌ春ノ霞ガサキコエヌ霞ヂヤ

こしの國へまかりけるとき志ら山を見てよめる

消はつる時しなければこしぢなる志ら山の名ハ雪にぞありける

○ノコラズ消ヲシマウ時ト云ハナクテ。イツデモアノヤウニ雪ガアレハ此ノ北國海道ノ白山ト云山ノ名ハ雪ノフヂヤワイ。

打聞說名はといへるにかおわず。

あづまへまかりける時道にてよめる

この歌を此ノ集の歌〳〵すと云事いかなるをこ人のいひ出けんよき歌なればこそ拾遺にも二度入り源氏物がたりにも書いたしたれ

糸による物ならなくに別路の心ぼそくもおもほゆるかな

つらゆき

○ナンデモ糸ニヨレバ細ウナルギヤガ。カウシテ故郷ヲ別レテキタ旅ノ道ハ。ソノヤウニ糸ニヨルモノデハナイノニ。サテ〳〵マア心ボソウ思ハルヽコカナ。

かひの國へまゐりける時道にてよめる

みつね

夜を寒みおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

○此ノゴロハ夜ガ寒サニ。草ヘハ霜ガフツテアルナイク夜カソノ霜ヲハラウテハチ。ハラウテハチ。野ノ草ヲ枕ニシテ。モウハヤ何度モ何度モチタ

ある人但馬の城崎といふところの湯なるべし二見の浦は播磨をり今て所のものはうたみと云ことなせりといへり

天の川ハ河内ノ國交野郡にありともにといふに友なると從ふとふたつありこゝハ從ふなり

たぢまの國のゆへまかりける時よふたみの浦といふ所にとまりて夕さりのかれいひたうべにけるともにありける人くうたよみけるついでによめる

藤原かねすけ

夕づくよおぼつゝなきを玉くしげ二見の浦はあけてこそ見め

○因此ノ二見ノ浦ノケシキヲ見タイモノヂヤガ。コヨヒハ雪月夜デ。マダ影ガウスケレバ。ハツキリトハミエヌニ。夜ガ明テカラヤトクト見ヤウ。

これたかのみこのともにかりにまゐりける時にあまの川といふところの川のほとりにおりいてさけなどのみけるついでにみこのいひけらくかりしてあまのがはらにいたるといふをよみてさかづき

ハさせといひけれバよめる　ありはらのなりひらの朝臣

かきくらしたなばたつめに宿からん天の河原よ我ハきにけり

○此方ドモハ今日ハ一日狩ナシテアルイテ。コレハ〳〵天ノ川原ヘキタワイ日モクレタニ。サテヨイ所ヘキタ。天ノ川ナレヤ。タナバタニ宿ナカラウ

みこ此の歌をかへす〳〵よみつゝかへしはせずなりにけれバとともに侍りてよめる　きのありつね

一とせに一たびきます君をではやどかす人もあらじとぞ思ふ

○イヤ〳〵天ノ川デハ一年ニ一度ヅヽ御出ナサル彦星ト云御方ヲ待ヂヤニヨッテ。ナカ〳〵外ノ者ガ。宿カラウト云タトテモ。借ス人モアルマイトヲ存ズル

朱雀院のならにおはしましける時に手向山にてよめる　すがはらの朝臣

此たびハぬさもとりあへず手向山もみぢの錦神のまに〳〵

○此ノ度ノ旅ハ御供ユエ。ヌサモ得用意致サナンダ。ソレユエ。神ハ御心ヤカセコト存シテ即チコノ山ノ紅葉ノ錦ヲソノマヽ手向マスル

たむけにはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やか〳〵さん　素性法師

○神ヘノ手向ニハ出家ノ身モ此トホリノ袖ナリモ切リキザンテ麻ニシテ手向ルハズ。ナレドモ。コノヤウニ見事ナ紅葉ノ錦ヲハラ一ッパイ見

宿かす人とハ織女をさして云ふ

寛平上皇を申す

此ノたびに旅をかねたり後撰に草まくら此たびへつる年月のと云フに同じとりあへずと句を切て意得べし

まに〳〵ハ万葉に隨意と書るところもあるに付てみな心のまゝてふとと思ふハわろしかの集ハその歌の意をしらしめんとて字をそへたるも多したゞまゝと云を重ねたりと意得べし

テ御座ナサルヽ神ナレバ。此ヤウナキタナイツヾリノ切レナドハ御受ケハナサルマイ。御返シナサルデガナゴザラウ。ソレユエサシヒカヘテ手向マセヌ

頭書 古今和歌集遠鏡卷九終

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十

物名　　藤原ノとしゆきの朝臣

うぐひす

心がら花の志づくにうぼちつゝ鶯とのみ鳥の鳴くらん

○オノガ心カラスキデ花ノ枝ニヌレナガラツライコトザヤ乾カヌト云フテ鶯ノヒタスラアノヤウニナクノハドウ云コトヤラ

ほとゝぎす

くべきほとときすぎぬれや待わびて鳴なる聲の人をとよむる

○郭公ガ待ツ妻ノ來ベキ。ヲセツカ過テコヾカシテ。マチカネテナシアノ聲ガ人ヲビックリサセル。時鳥のうへの戀の歌あり。餘材わろし。打聞よろし但し結句の説はわろし

雲の名をかくしてまたその島のうへをよめり

此ノ歌によりてのちのちによみあやまれる歌ども多し

人をよましむるハかれが鳴音をめづるにつけて人の云さわぎ思ひさわぐをいふなり

蟬ハ脱殼のあるものなれば今て鳴をもうつせみと歌によめりこゝもたゞ蟬のことなり是ハ今の京となりてのならハせごとなり

うつせみ　在原ノ志げはる

涙のうつせみれば玉ぞみだれけるひろはゞ袖にはかなからんや

○涙ノウツ川ノ瀬ヲ見レバ。水玉ガ。トソトマコトノ玉ガナナルヤウナワイアノ玉ヲヒロウタナラ。ホンノ玉デハナイホドニ。袖ヘ入レウトシタナラギキニ消ルデアラウカ。餘材わろし。

かへし　王生ノ忠岑

たもとよりはなれて玉をつゝまめや是なんうれとうつせみんかし

○貫樣ハ袖ヘ入レウトシタナラザキニキエルデアラウガト云ハシヤルガテモ袖ヲオイテ外ニ玉ナツゝマウ物ハナイハサテ。スレヤ貫樣ノ袖ヘツ。ソデコレガサツレデゴザルト云テ。ワシカ袖ヘウツサツシヤレ。ワシモ見ヤウワ。打聞よろし。餘材わろし

あなハあゝなとなげく詞なりものハ初の句にかゝせり

かづくとハ頭を地につきてうやまふとをぬかづくといふ又祝詞にうなねつきぬきともいへりそれをうつして頭に衣など打かくるをもかづくといひ海人のうみに入をもかたちもてかづくといへり

うめ　よみ人しらず

あなうめよつねなるべくも見にぬかな戀しかるべき香ハにほひつゝ

○梅花ヽヤレ〳〵ウイ物ヤ。マモナウ散テシマイサウデ。目ニ常住見ラレサウニモ見エヌコカナ。ソノクセアトデ戀シガリサウナ香ハヨウニホウテナ

かにはざくら　つらゆき

かづけども涙のなかにハさぐられて風ふくことにうきしづむ玉

○海ニ涙ガ立テ水玉ノナツテキエルノハ。玉ノヤウナガ。ソレヲホンノ玉ヂヤト思ウテ。其ノ海ノ底ヘハイツテ取ウトスレドモ。涙ノ中デハ。ドウモ手ニアタライデトラレヌ。ソシテ風ノフク度ニテウド底ニアル玉ガ。ウイテハシヅミ。ウイテハシヅミスルヤウニ見エル

ながめハ物思ひあるとき物見るとハなしに久しくまもりをるをいふよりてものおもひするとながめといふは後にハたゞ見るとばかりするハあやまりなり

此ノ歌ハ山たち花さきありしを後に山の字をうつゝもうせしが今ハつたへしなるべし歌にハしかよみて猶次にもをかたこの

すもゝの花

今いくか春しなければうぐひすのものハながめて思ふべくなり

○モウ春ノアヒダハナニホドモナケレバ。ソレヲ殘リ多ウ思フテ。人トモウ春ノアヒダハナニホドモナケレバ。ソレヲ殘リ多ウ思フテ。人ト同ヤウニ驚モシンキサウナカホシテ。物思イスルヤウナサウ見エル

からもゝの花

あふからものはなほこそ悲しけれ別れんをかねて思へば

ふかやぶ

○逢フタラウレシイハズヂヤニ。逢ヒナカラモヤッパリソレデモナカナシイワイ。アヘバマタ別レヌサキカラハヤ。別レルコトヲ思ウニヨッテナ

たちばな

あし引の山たちはなれ行雲のやどり定めぬ世にこそ有けれ

をの〳〵おげかげ

木山がきの木などついてならべたるにてしか思ふゝなり

和名抄に鹿心柿と書てやまがきとよめり

○山カラ立ツハナレテイク雲ノトマリドコロノ定マラヌヤウナモノデトシト行ク末ノサドウナラウヤラシレヌ世ノ中ヂヤワイノ

おかたまの木

打聞をかたまの木の説うけがたし

ともの里

見よし野のよしの〳〵瀧ようかび出る沫をかたまのきゆと見ゆらん

○吉野ノ瀧ヘウキデル水ノ沫ヲ人ハ。玉ガ出テキエルト見ルデアラウガ

やまがきの木

よみ人しらず

横井千秋云。山柿はちひさくむらがりてある柿にて。世に信濃柿ともいふ。又材に黑柿といふも是あり

吉野柿ともいふ。

秋ハきぬ今やまがきのきりぎすよなゝながむ風の寒さに

○秋ガキタコレデハ風ノ寒サニ。マガキノキリ〴〵スガ。モウオツ〳〵ケ

あふひハ常の如くなりかつらハ桂なりとのとにハあらず

てふハ花をしたふものなれバ云出てあまりに物に思ひなづむ人を教へてよめり蝶

ヨナ〜ナクデガナアラウ　清

あふひかつら

かくばかりあふひのまれになる人をいかゞつらしとおもはざるべき

○コレホドニ逢事ガマレニナツタ人ヲ。ドウシテツライト思ハズニ居ラレウゾ。ツラウ思ハイデハ

人めゆゑ後にふあひのはるけくハわゞつらきにや思ひなされん

○人目ヲツヽムユエニ。コレカラ後ニモシ逢フ事ガ遠ウナツタナラ。ソノケハシラズニ。コチガツライノニナルデガナアラウ

僧正遍昭

くたに

ちりぬれに後ハあくたになる花を思ひまらずもまどふてふ哉

ハ字音にのみいひて和名ををいす新撰字鏡に蝶の和名かはひうぢといへりうもみちのくにてはあまびらと云よし

をみなめしとよむへの濁れるをめとなふるなりされどこゝはをみなへしとなへしなるべし

さゝぶにハ蛛なりもハら笹にすむ物にて

○花ハチツテシマヘバ後ニハ芽ニナツテナンデモナイ物ヂヤニ。ソレヲエガチンセズニアハウナ。サテモマア花ニマヨウコカナ

さうび

われハけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

○オレハ花ト云物ヲ今朝始メテ見タガ。花ナバ世間ノ人ガアダナ物ヂヤト云ヂヤガ。ナルホド見レバ。アダナモノト云ベキ色ヂヤワイノ。

打聞よろし

をみなへし

白露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にも糸をみなへし

○露ヲ玉ニシテツナグトテヤラ。蜘ガ女郎花ノ花ヘモ。葉ヘモミナ糸ヲ引テカケタ

ともの り

蛍にかたちの似たれバさゝがにといふなり

これハ今の京なる嵯峨の小倉山なるべし

桔梗の字音なり

朝露を分うほぢつゝ花見んと今ぞ野山をみなへしぬる

○女郎花ヲ見ヤウト思フテ。朝露ヲ分テヌレ〳〵アルイテ。今日ハ野ヤ山ナドコモカシコモミナトホッテ知ッタ

朱雀院のをみなへし合せの時にをみなへしといふいつもじをくのかしらにおきてよめる　つらゆき

をぐら山みね立ならしなく鹿のへにけん秋をしる人ぞなき

○小倉山ノ峯ノアタリヲアチコチアルイテ鳴ク鹿ノ。ユレマデ經テキタ秋ノ數ヲ何ン年ヂヤカシル人ハナイ

きちかうの花　とものり

あきちかうのハなりにけり白露の置る草葉も色かはり行

業花の字音なり

龍膽なり今りうどうと云は唐音の轉ぜるなり

野ノケシキヲ見レバ。冬ガレノ物カナシイ時節ガ近ウナッタワイ。露ノオイタ草葉モ色ガカハッテキタ。秋とは物がおしき時節をいへりさるたぐひ例秋の部にも秋はきぬ紅葉はやどに云々あるべあり。考へ合すべし。

よみ人しらず

ふりはへていざ故郷の花見んとこしをにほひぞうつろひにける

○ドレヤ昔ノ在所ノ花ナイテ見ヤウト思ウテ。ワザ〳〵キタモノナモウサ色ガカハッタツイ

りうたんのはな　友のり

わがやどの花ふみしだくとりうたんのはなけれバやこゝにしもくる

○コチノ庭ノ大事ノ花ヲフミアラス。アノ鳥ヲオウテヤラウ。住ム野ガナイカシテ。トカクコヽヘ來オル。志だくは志のくと本ト同言なり。

率牛子なり和名抄にあさがほといへり

をばな

よみ人しらず

をばなハ尾花なり。打聞の説わろし萬葉の歌の見あやまりなり。

ありと見て頼むハかたきうつせみのよをばなしとや思ひなしてん

○惣シテ世中ノ事ハナンデモ。有ルモノヂヤト思ウテ。頼ミニシテモ頼ミニハナリガタイ。オレヤ目世ノ中ノ事ヲバ皆無イモノヂヤト。レウケンヲツケルガ。ヨカラウカイ、

けにごし

やたべの名實

うちつけにこしとや花の色を見んおく白露のうむるばかりを

○花ヲ見テサツキヤクニ濃イ色ヂヤト見ヤウモノカ。アレハ花ノ色ノコイノデハナイ。オイタ露デヌレテ。ソレデアノトホリニ濃ウ見エル

けづり花は今云つゝり花なり花二枚云ゝ

和名抄に苔の類にて垣衣一名鳥亟しのぶくさといへるもこれにて古き軒ふるき築土などに生るものなり

パカリヂヤモノヲ

二條后春宮のみやすむ所と申ける時にめどにけづり花させりけるをよませ給ひける

ふんやのやすひで

花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな

○此ケヅリ花ヲ見マスレバ花ノ咲ヘキ木デモアルマイケレド。花ガサキマシタワイ。致セバナルマジイ木ヘモ木實ノナルヤウニ年ヨリマシタ私ガ此ノ身モドウヅ立身イタス時節モアレカシト願ヒマスル儀デゴザリマス。餘材。四の句の初の説いとわろし。

きのとしさだ

山高みつねにあらしのふくさとハにほひもあへず花ぞちりぬる

和名抄に知母をやましといへり

○近所ナ山ガ高サニ。シヤウヂウ。嵐ノフク里ハ花ハサキテアルマモナシニツイ散ッテシマウワイ。打聞。四の句の説あろし。

平〻あつゆき

時鳥みねの雲にやまじりにしありとハきけど見るよしもなき

○時鳥ハ峰ノ雲ノ中ヘトンデイタカシラヌ。アソコラデ鳴ットハ聞エルケレド。ドウモ形ハ見ヤウヤウガナイ

よみ人しらず

からはぎ

千秋云。清暑堂の御神樂の時に。人長かれたる荻の枝を持ッてあり。これを枯荻といふよし。體源抄などに見ゆ。又いとしろく枯たるをぎをたかやかにかざしなど源氏物語にも見たり。されバこれハもと。からをぎとありて歌も二の句。からを木毎にとありけんを。題の荻を萩にあやまりて。歌のてにをはをも。うれよりて改つるものにはあらじ歟。

うつせみのからはきごとにとゞむれどたまの行へを見ぬぞ悲しき

○蟬ノカラヲバヌギステヽドノ水ニモトメテオイテ。其身ハドコヘカ飛ンデイヌルカ。此ノ人間モテウドソンナセノデ。人ゴトニ死ヌレバミナカラダヲバ棺ノ中ヘトメテオケバ。カンヅンノ魂シヒハドコヘトンデイヌルヤラ。ユクヘガシレヌヤウニ。ナッテシマウノハ。カナシイヿヂャ打聞よろし

かはなぐさ

うばたまの夢に何かはなぐさまんうつゝにだにもあかぬこゝろを

○逢ヒタイト思フ人ハ夢ニテモ見レバ心ガヤルト云ヿナレドモ。曰夢ニ見

和名抄に河苔かはなといへる是なり

日陰といひて白はなる苔の奥山の古木の枝などに生たるを云さるをがせと云物なり

和名抄に長間竿竿背晩〻生 昧大〻苦也といへりこれなるべし今ハ女竹ともしのめ竹ともいふなり

タバカリデドウシテ心ガサヤウヅ。シヤウジンニ逢テサヘマダタラヌヤウニ思ウ心ヂヤモノチ

さがりこけ　たかむこのとしはる

花の色はたゞ一さかりこけれども　かへすがゝぞつゆハうめける

○花ノ色ノ濃イノハ。タツタ一サカリデ。ワヅカノ間バカリナレドモソレヲ露ハ。毎朝毎晩ナンベンモ〳〵サソメルワイ。タツタ一サカリナモノヲ。ソノヤウニ染ズトモヨイワチ

にがたけ　ふはげる

にゲたけハ次なるかハたけとゝるにくさびらの名（なりうつほ物語に見ゆ千秋云。にかたけハ。苦茸。かはたけハ。革茸なり。）

いのちとて露をたのむにかたけれゞ物わびしらに鳴野べの虫

和名抄に苦竹かハたけといへるこれなり

蕨を薪火にとりなせり六帖にもみよしの〻山のかすみをけさ見ればわらびのもゆるけふりなりけりかくざまによめるがおほし

○野ヘンノ虫ハ。露ヲ命ヂヤト思ウテ頼ミニスレドモ。頼ミニナリニクイ。ハカナイモノヂヤニヨッテ。難義ニ思ウテカナシサウニ鳴ク

かけのりの王

はたけ

さよふけてなりぬたけ行久かたの月吹かへす秋のやまかぜ

○夜ガフケテモウ半分ホドモタケテイクアノ月ヲ東ノ方ヘ吹カヘセ秋ノ山ノ風ヨ

わらび

志んせい法師

烟たちもゆとも見えぬ草の葉をたれかわらびとなづけうめけん

○ソラ火ナラバ。烟ッモ立ッテモエルハズヂヤニ。烟モタヽズモエルに見エヌ草ノ葉ヂヤモノヲ。誰カワラ火ト云。名ヲツケソメタヿヤラ

千秋云。この歌ハ。物名のよみざまにあらざれば。此の部に入へきにあらず。

いさゝめは万葉に卒爾とかきしもいさゝめとよむべき歌どもなりさてかりそめてふ意なりとは思はる

あぢきなしハ心うしともにがゝしきともいふ意なりなけきなつめりハなげきをあつめりといふなり

さゝまつびハ清はせをば　きのめのと

いさゝめに時まつまにぞひハへぬる心ばせをぞひとに見えつゝ

○近イウチニ逢イマセウトタガヒニ約束ヲシテオイテ。其日マデハツイワヅカノ間ダノヿニ思ウテ待ツアヒダニ。大分日數ガタツタワイ。コレデハトウアラウカ。逢ウヿハ心モトナイモノヂヤ。逢ハウト云ワシガ心アヒヲバ人ニ。見ラレテマア。エヽコンナヿナラ約束セヲバ。ヨカツタニ

なしなつめくるみ　兵衛

あぢきなしなげきなつめぞうきとにあひくるみをぞすてぬものから

○イロ〳〵サマ〳〵ノウイヿトニアフテ來タ此ノ身ヲエステモセズニ居ナガラツノウイ事ノカズ〳〵ヲトリアツメテナゲカウヿデハナイアヽ

ムヤクナヿヂヤ

からとといふところに春ての立ける日よめる　安部清行ノ朝臣

涙の音のけさからとに聞ゆるハ春のゑらべやあらたまるらん

○アノ涙ノ音ノケサカラカハツテ聞エルノハ。此ノ唐琴ノ調子モケサカラハ春ノ調子ニナツテ。キノウマデトハ改マツタガシラヌ

いかゞさき　かねみのおほぎみ

かぢにあたる涙のゑづくを春なれゞいかゞさきちる花と見さらん

舟ノカヂヘアタツタ涙ノクダケテナル事ガ。今ハ春ナレバ花カナルト思ハレル。トント花ヂヤ。アレナドウシテ花ト見ヌモノガアラウゾ。

花のさきちるといふは。たゞちるとなり。例みなゑかり。打聞わろし。

唐琴は備前の國にあるところなり

いかゞさきたしかなちす崎は山崎をか崎など水邊ならでも云河内茨田郡に伊香の郷あり近江に伊香郡あり又かげろふ日記にいかゞさきありこれによれば近江なるべし

水のはるてふ詞秋の歌にもみちばのながれざりせば龍田川水の秋をば誰かしらましとよめるに同じ

からさき

かのかたにいつからさきらざりけり

○見レバアレアノ辛崎ニ人ガ立テヰルガ。アソコヘハ今マデニ何時渡ッタ。イツカラアヽシテ居ルコヤラ。今マデニ渡ッタナラ。其アトガアリソナ物ナレ尼。涙ノ道ナレバ渡ッタ跡モノコッテハナイワイ

あほのつねみ

涙の花おきからさきて散くめり水の春とは風やなるらん

伊勢

○涙ノ打ヨセテクルノハ。テウド花ノチッテクルヤウニ見エルガ。此ノヤウニ打ヨセテ磯ヘチッテクル涙ノ花ハ。アノ沖ヘサイタ花ガ沖ノ方カラチッテ來ル樣子ヂヤ。サテ花ヲサカスノハ春ノコナリ涙ノヨセテクルノハ風ユエナリ。スレヤ水ノタメニハ。風ガ春ニナリカハッテアノヤウニ花ヲサカスカシラヌ。打聞説上句にかゝはす

北野と平野の間をながるゝ川なりいにしへこゝにて紙をすかせ賜へり

つらゆき

うゞ玉のわが黑かみやかはるらんかゞみの影にふれるおら雪

○オレガ黑イ髪ガ色ガカハッテシラガニナッタカシラヌ。鏡ヘウツヽタ影ヲ見レバツムリヘマッ白ニ雪ガフッタ

よどがは

あし引の山べにをれゞ白くものいかにせよとかはるゝときなき

○山里ニ住ンデ居レバ。シヤウヂウ雲ノハレルヰモナイサウナウテサヘ氣ノツマッタ山ノ中ヂヤニ。何ントセイト云フテ此ノヤウニ雲サヘ晴ルトキモナイコヲ

たゞみね

かた野

河内の片野郡山城のさかひなり

今昔物がたりに五條西洞院にかつらの宮と申人おはしますその前に大なるかつらの木あり故に名ゴけまおらせたるなり云ふこゝのことなるべし

夏草のうへハ去げれる ぬま水のゆくかたのおきわが心かな

○拙者ガ身ハテウド。ウヘニハ夏ノ草ガ一ッハイハエシゲッテ。アルヤラナイヤラシレヌ沼水ノヤウナモノデ。世間ノ人ニモシラレヌ立身モエセヲバテウド又ソノ沼水ノ流レテ行ノ所ノナイヤウニ。扨サテ心ノユカヌコトカナ。オモシロウナイコトカナ

かつらのみや

秋くれど月のかつらのみやハなる ひかりを花とちらす ばかりを

源ほどこす

○ソウタイノ木ハ秋ハ實ガナルモノヂヤガ。月ノ中ナ桂ハ。秋ガキタトテ實ガナルカ。實ハナリハセヌカ。タヾ秋ハ常ヨリサヤカナ光ヲ花ノヤウニ思ウチラズバカリノコヂヤモノヲ。ソレニ世間デ秋ノ月ヲバカクベツニ賞翫スルバドウ云コヂイ

和名抄に百和香ありから國のむかしありし香なりこゝにもつたへ來しなるべし後世この香の傳をいろ〳〵いへどさだかに傳ハれりとも見へず

紙に墨をながして文なせるなり今もあるものなり

炭をおこしたる火なりはぶきておきとのみもいふ

百和香

よみ人しらず

花ごとにあかずちらしゝ風なれゞいくぞハくわかうし とかハ思ふ

○花ト云花ヲバドレモミナ。殘リ多イニナラシテシマウヤッナレバ風ヲバオレハドレホドフツクニ思ウヅ。タイテイ不足ニ思ウコトデハナイ

すみながし

春がすみなかしかよひぢなかりせゞ秋くる雁ハかへらざらまし

○春ノ霞ノベッタリトフサガッテアル中ニ通ッテイク道ガ。ナイナラバ秋キタ雁ガ春カヘリハスマイニ。霞ノ中ニモ道ガアルデ落ハカヘルデアラウ

おき火

流れいづるかたゞに見ぬ涙川おきひんときや底ハ去

みやこのよしか

河内の片野郡山城のさかひなり

今昔物がたりに五條四洞院にかつらの宮と申人おはしますその前に大なるかつらの木あり故に名づけまゐらせたるなり云々このことなるべし

夏草のうへハおげれるぬま水のゆくかたのなきわが心かな

○拙者ガ身ハテウド。ウヘニハ夏ノ草ガ一ッハイハエシゲッテ。アルヤラナイヤラシレヌ沼水ノヤウナモノデ。世間ノ人ニモシラレヌ立身モエセヂバテウド又ソノ沼水ノ流レテ行ク所ノナイヤウニ。扨サテ心ノユカヌコトカナ。オモシロウナイコトカナ

かつらのみや　源ノほどこす

秋くれど月のかつらのみやハなるひかりを花とちらすばかりを

○ソウタイノ木ハ秋ハ實ガナルモノヂヤガ。月ノ中ナ桂ハ。秋ガキタトテ實ガナルカ。實ハナリハセヌカ。タヾ秋ハ常ヨリサヤカナ光ヲ花ノヤウニ思ウチラズバカリノコヂヤモノヲ。ソレニ世間デ秋ノ月ヲバカクベツニ賞翫スルバドウ云コヂイ

和名抄に百和香ありから國のむかしありし香なりこゝにもつたへ來しなるべし後世この香の傳をいろ〳〵いへどさだかに傳ハれりとも見へず紙に墨をながして文なせるなり今もあるものなり

炭をおこしたる火なりはぶきておきとのみもいふ

百和香　よみ人しらず

花ごとにあかずちらしゝ風なれバいくぞハくわかうじとかハ思ふ

○花ト云花ヲバドレモミナ。殘リ多イニナラシテシマウヤツナレバ風ヲバオレハドレホドフツクニ思ウヂ。タイテイ不足ニ思ウコトデハナイ

すみながし　ちなかりせば

春がすみなかしかよひぢなかりせバ秋くる雁ハかへらざらまし

○春ノ霞ノベツタリトフサガッテアル中ニ通ッテイク道ガ。ナイナラバ秋キタ雁ガ春カヘリハスマイニ。霞ノ中ニモ道ガアルデ春ハカヘルデアラウ

おき火　みやこのよしか

流れいづるかたゞに見ぬ涙川おきひんときや底ハおも

河にハ沖といふことうたがう人もあるべし万葉によしの〻川の沖になつさふとよめるなり

茲ハ飯をを青き瓦盛草にてつゝみ黄糸をもてまくと大膳式に見えたり

春をはじめ終りにしてながめと云詞を歌の中に云ひかけてさられん

○流レテ出ル源サヘドチヂヤカシレヌ。涙川ナレバ。マシテ底ノ深サハイカホドアルカシレヌカ。モシ沖ノ深イ所マデ。水ノ干ル時ガアツタナラ。底ノ深サモ見エルデアラウガ

大江千里

ちまき

のちまきのおくれてゐるなゝなれどあだにはならぬたのみとぞきく

○後時ノオクレテ。ハエタ苗デモ。ムダニナツテシマイハセズニ。秋ハヤツハリ實ノツテ頼ミノアル田ノ稲ヂヤトヽ。聞及ンデ居ル。スレヤ學問デモナンデモ。オソガケヂヤト云テ爲マイヤウハナイヅヤ。打聞四の句の注俗意あり

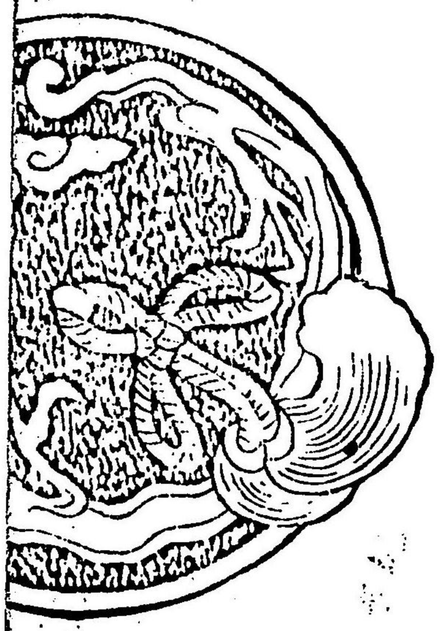
はをはしめ。るをはてにて。ながめをかけて時の歌よめと人のいひけれバよめる

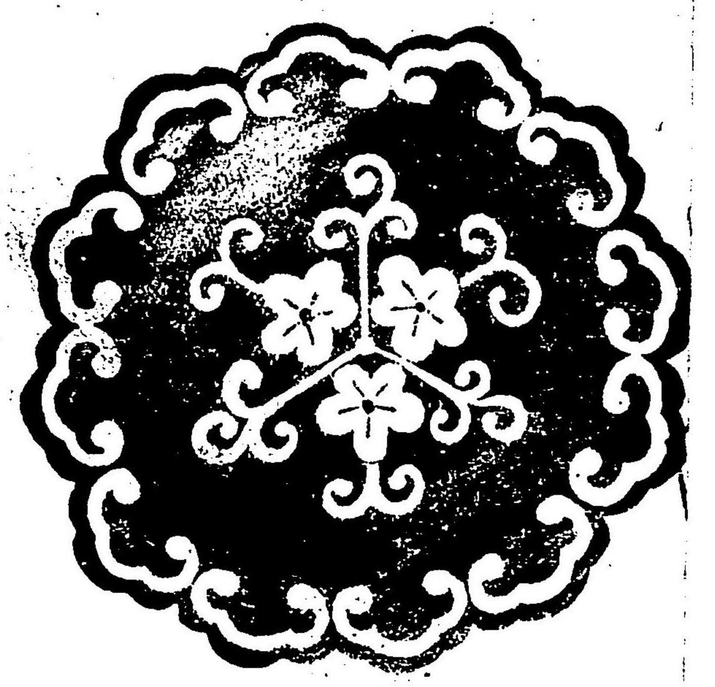
て今の時のうたをよめと云此ながめハ春の長雨の事なるべし

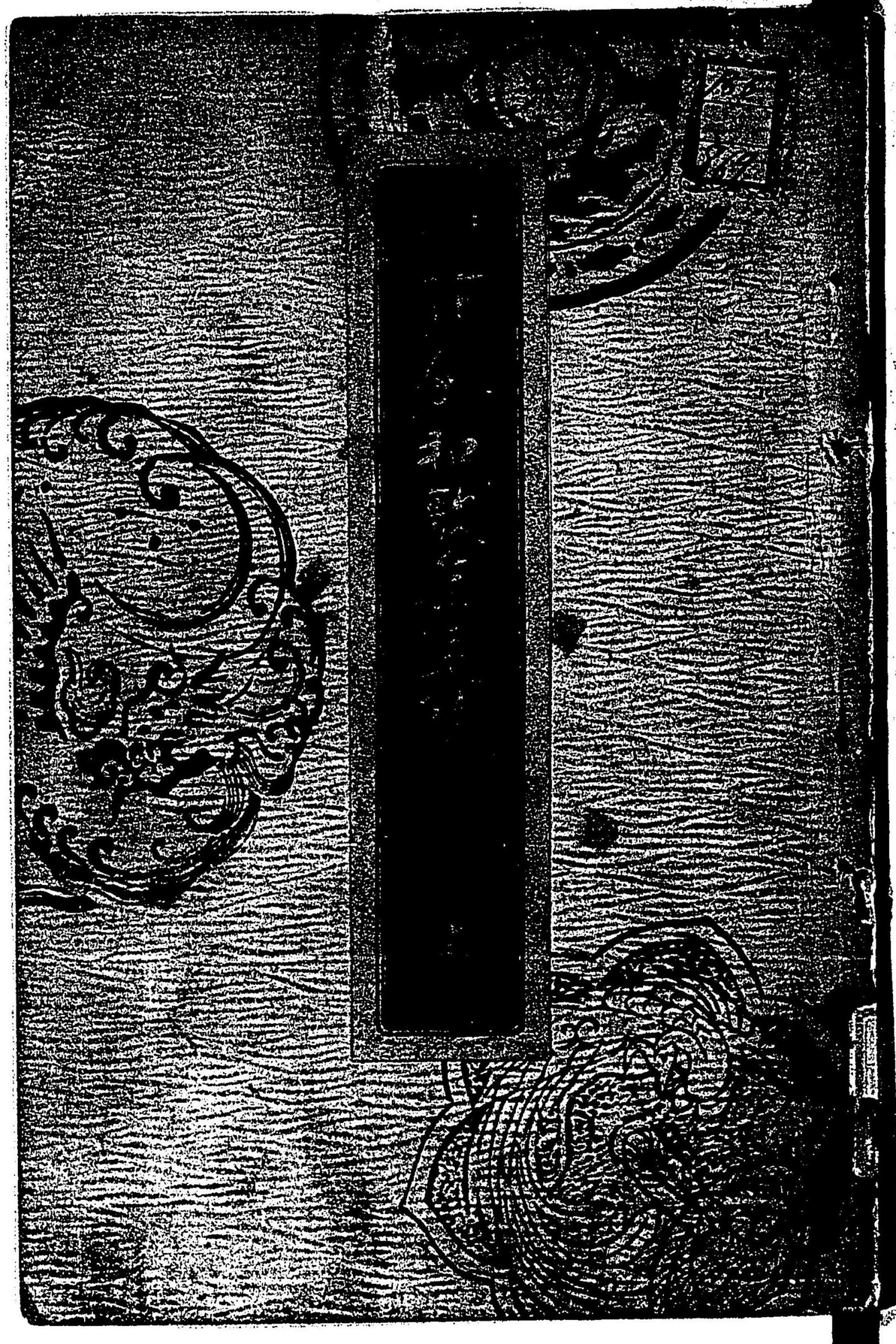
花のながめにあくやとて分ゆけ〻心ぞともにちりぬべうなる　僧正聖寶

○ヅンブン目ニ見飽カト思ウテ。花ノタヌシト咲テアル中ヲ分テイケバ花ニ目ガ移ッテ。コチノ心ガッ花トイッショニ。アチコチトチッテイクヤウナ心モチガスル

頭書古今和歌集遠鏡卷之十終







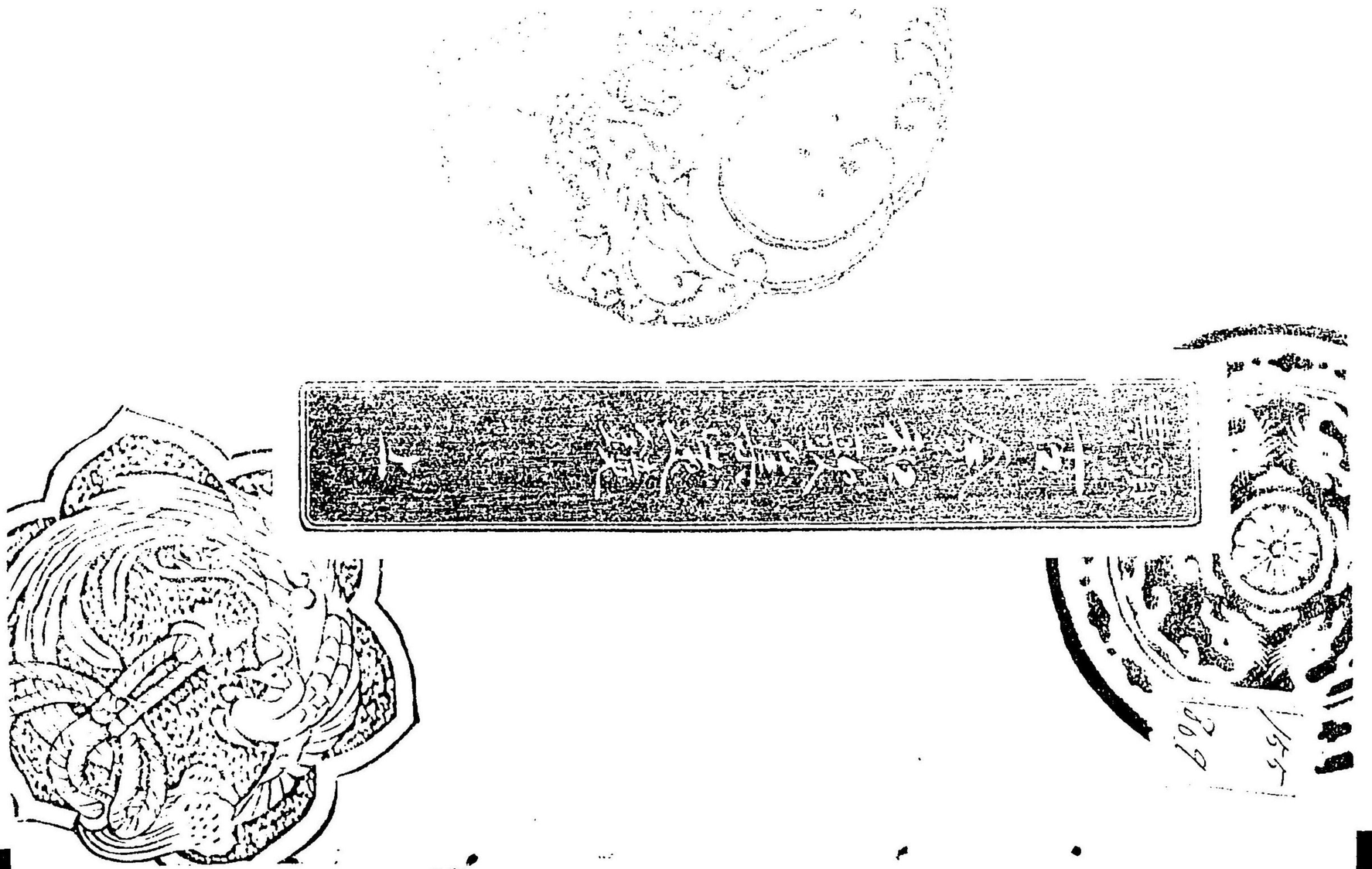
085951-001-8

特22-212

古今和歌集遠鏡（頭書）

本居　宣長／著

上

M24

DBD-0568